西方世界とインド洋貿易 (5)

——ヘレニズム時代・ローマ帝制初期を中心に——

荻　野　　博

Ⅷ　ローマ帝国時代初期のインド洋貿易の展開(3)——西北インド方面——

Periplus Maris Erythraei(『エリュトゥラー海案内記』，以下 *Periplus*) の作者は，アラビア半島沿岸，ペルシア湾沿岸，およびパルシダイ地方沿岸の記述に続いて，インド沿岸の記述に移り，西北インド沿岸から南西部のマラバール沿岸，さらに東海岸やそれ以東の状況を，奥地の事情にも触れながら，次々に述べている。

インドは古来物産豊かな国として知られており，古代においても西方世界の需要する各種の香料，なかんずく胡椒，宝石類，綿織物，真珠などを産したばかりでなく，中国産の絹，その他の東方世界の物産も送られてきていた[1]。そのため *Periplus* の書かれたころは，エジプトのアレクサンドリアを基地とする西方世界の商人が，季節風を利用してインド洋を横断し，西北インドおよび南西部のマラバール沿岸の商業地へ来航して，盛んに貿易を営んでいたのである。ここではそのうち西北インド地方との貿易について，やはり *Periplus* の記述を中心とし，その他の古典作家の記述や考古学の成果などを参照しながら，考察を加えてみたい。

インダス河口地帯の状況

Periplus の作者は，かれが来航したことがなかったと考えられるパルシダイの地方の漠然とした記述に続いて，インダス川の河口地帯について，次のように述べている。

「此の地方（パルシダイの地方——引用者）の後には湾が深く入り込んで居る為に今や海岸が東から海中に突出して居るが，真北に横たはるスキュティアーの沿海の部分が続き，実に低平の地方で，其處からシントス河が〔海に注ぐ〕。これはエリュトゥラー海の河の中で最も大きく且つ極めて多量の水を海中に注ぐので遠くまで，そして人が陸地に近づくより前に，此の河からの清い水がやって来るのである。（中略）此の河には七つの河口があるが，これらはさゝやかで沼地風であり，臨海の商業地バルバリコンのある真中の河口を除いては他は航行が出来ない。（下略）」[2]

この記述に見られるシントス Sinthos は，サンスクリットの Sindhu に相当するものと考えられるが，サンスクリットのｓの音はペルシア語ではｈとなり，そのｈがギリシア語では脱落して Indos となったといわれ，シントス川は今日のインダス川をさしていると考えられる。今日インダス川はすくなくとも11の河口を数えることができるが，２世紀のプトレマイオスの地理書にも，*Periplus* と同様に，７つの河口

1) インドは近代においてはイギリス植民帝国の宝庫として，きわめて重要な地位を占めていたが，古代においても物産の豊かな国として知られていた．プリニウスは大著『博物誌』の結びの文章で，自然の恵みの最大のところはイタリアで，それに次いではインドであると述べている．(*Naturalis Historiae*, XXXVII, lxxvii, 201-202) また『後漢書』巻八十八，西域傳，天竺國の条には「天竺國一名身毒。在二月氏之東南一。俗與二月氏一同。而卑濕暑熱。其國臨二大水一。……土出二象犀瑇瑁金銀銅鐵鉛錫一。西與二大秦一通。有二大秦珍物一。又有二細布好氎氎諸香石蜜胡椒薑黒鹽一。……」とあり，インドが各種の物産に富み，かつ大秦国との交易によって，大秦の珍物もさまざまにあることが記されている．

2) *Periplus* 38. 村川堅太郎氏著『エリュトゥラー海案内記』，生活社，昭和21年（以下「村川氏」）所載の邦訳による．同著，104-105頁．なお以下の *Periplus* の引用も，村川氏の邦訳によることとする．

があげられている[3]。

ところで，上述の引用文によれば，インダス川の河口からその北方にかけての地帯はスキュティアー Skythiā と呼ばれている。プトレマイオスもインダス川に沿う地域が Indoskythiā という名称で呼ばれていると書いているが[4]，ここにいうスキュティアーは，ペルシア人がサカ Saka(サンスクリットではシャカ Śaka, 漢籍では塞)族と呼んでいる民族の地方という意味で，当時はこの地方にはサカ族が住んでいたものと思われる。もっとも *Periplus* には，上述の引用文に続いて，スキュティアーの首都はミンナガル Minnagarで，「パルティア人の王により支配されて居るが，彼等は絶えず互に追ひ出し合って居る」と記されているから[5]，当時はインダス河口地帯に住むサカ族は，パルティア人の支配下にあったことがうかがわれる。

古代のインドや中央アジアの歴史は判然としない点が多いが，サカ族はもともと中央アジアの遊牧民で，イリ川の流域を占拠していたようである。ところが，前160年よりやや以前に，匈奴に攻められた月氏族に追われて，かれらは南下しはじめた。かれらは多分いくつかにわかれて移動し，前140年から120年までの間にパルティアおよびバクトリアに侵入し，パルティアのフラアテス Phraates 2世は前127年ごろかれらと戦って戦死し，次のアルタバヌス Artabanus 1世も数年後同じ運命におちいった。

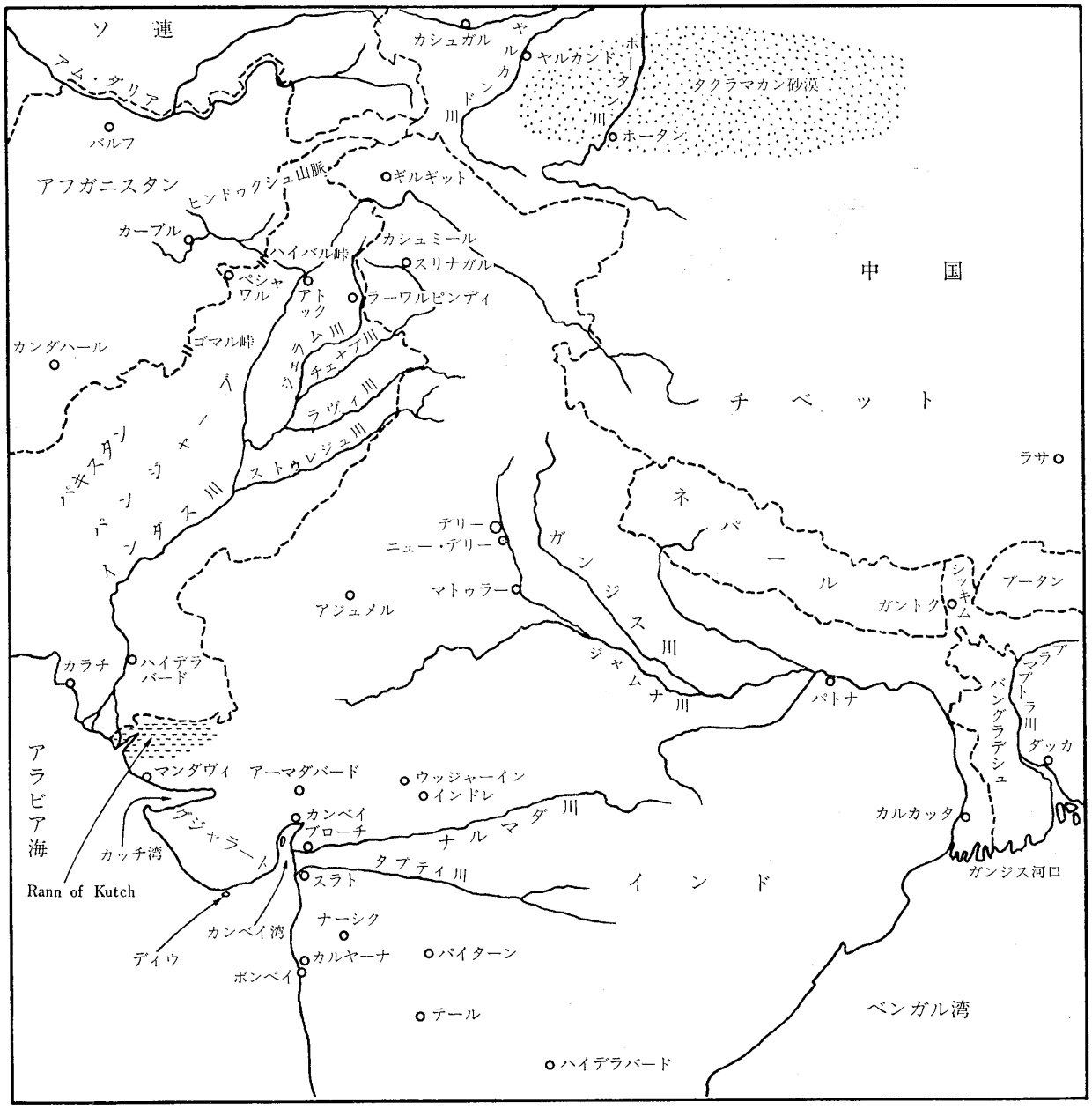
3) 村川氏，190頁；Wilfred H. Schoff, *The Periplus of the Erythraean Sea*, Longmans, 1912(以下Schoff), p.165; Klaudios Ptolemaios, *Geographikē Huphēgēsis* VII, 1, 2. プトレマイオスはインダス川を Indos と書いているが，西から数えて2番目の河口名を Sinthōnとしている．*Periplus* の Sinthos は他の古典作家の記述には見られず，ストラボン，アルリアノス，その他の人々は，プトレマイオスと同様に Indos と書いている．なお *Periplus* の作者は，インダス川がエリュトゥラー海に注ぐ川のうちで最大であると書いているが，ペルシア湾頭に注ぐシャト・エル・アラブ川はインダス川より大きい．そのほか揚子江，メーコン，イラワディ，ブラマプトラ，ガンジスのアジアの諸河川も，いずれもインダス川より大きい．しかし，これらの河川を作者は見ていなかったわけである．(Schoff, p. 165；村川氏，190頁)．

4) Ptolemaios, VII, 1, 55.

5) *Periplus*, 38. 村川氏，105頁；Schoff, p. 37.

またギリシア系のバクトリア王国はついに滅亡してしまった。パキスタンとの国境に近いイラン東部のシースターン地方は，かつて Sakastēnē と呼ばれたが，これは「サカ族の地」という意味であり，かれらは一時この地方を占拠していたものと思われる。サカ族の移動の波はまたインド方面にもおよび，かれらはパンジャーブ地方のタキシラ Taxila とガンジス川に注ぐジャムナ川の上流のマトゥラー Mathrā 地方を占拠したらしい。かれらは，インド方面でもパルティア人と密接な関連があった。パルティアは，上述のフラアテス2世に先だつミトラダテース Mithradatēs 1世 (*c.* 前171—138) の下で諸方に版図を拡大し，その領土はインダス川に達し，あるいはこれを越えてその東方にまでおよんだようである。そこでインド方面に進出したサカ族の首長たちは，パルティアに従属し，ペルシア的なサトラプ satrap という称号をとり，1世紀以上の間支配を行なったらしい。このようにして，この地方にはパルティアーサカ系統の支配がうまれたのであって，Indo-Parthian と呼ばれるものがこれである。前95年ごろ西パンジャーブ地方を支配したマウェース Mauēs は，インド・パルティアンのもっとも早い王の1人であり，かれは「諸王の王なる大王」(Mahārājasa rājarājasa) という称号を冠した。ゴンドファルネース Gondopharnēsもインド・パルティアン系の王の1人で，かれは紀元20年ごろ王位につき，シンド Sind (インダス川下流域) およびアラコシア Arachosia (今日のアフガニスタンのカンダハール地方) を征服したらしく，パルティアの支配を脱して，広大な領土の主人公となったが，紀元48年ごろかれが没すると，かれの王国は分裂し，やがてこの地方はクシャン(貴霜)朝によって征服され，ここに北インドはクシャン朝の支配下に入るのである。なおインドに入ったサカ族の一派は，さらに南下してグジャラート Gujarāt (カーチャワール Kāṭhiawār)半島を占拠してサカ王朝をうちたて，この方は390年ごろまで存続した。また *Periplus* が書かれたころ，インダス河口地帯には

第1図　現代の北インド・中央アジア略図　(……は国境線)



パルティア系の支配者がまだ存在していたことは，さきに述べたこの書の記述から知られるわけである[6]。

Periplus にはスキュティアーの首都がミンナガル Minnagar であると記されている。そしてそこは河口の「背後の内地」にあると書かれているので，ミンナガルは河口からやや川をさか上ったところにあったことが推測されるが，その正確な位置は明らかではない。プトレマイオスはこの地域に Binagara という地名をあげ

6) 以上のサカ族の歴史に関する部分は，主としてスミスの所説による．(Vincent A. Smith, *The Early History of India from 600 B.C. to the Muhammadan Conquest*, 4th ed. revised by S. M. Edwardes, Oxford, 1924〔reprint 1967〕〔以下 Smith〕, pp. 240–45.) もっともサカ族の歴史に関しては，いまなお学者の間にさまざまに意見がわかれており，とくに年代について明確でない点が多く，定説というものはないようである．たとえば，マウエース王の年代について，中村元氏は前129年より以前ではありえないし，前33年より↗以後でもありえず，前1世紀中葉よりも前であると推定されると述べ，また一説によれば前90—80年ごろであるというと書いておられる．(中村元氏著『インド古代史』下，春秋社，昭和41年〔以下「中村氏」〕，107頁.)

ており，これはミンナガルに相当するものと考えられているが，プトレマイオスのインドに関する記述について詳細な研究を行なったマックリンドルも，ミンナガルの位置は定かではないといっている。カニンガムもその正確な位置は明らかでないといっているが，インド・スキュティアーの首都が Thatha にあったことは，ほとんど疑いがないともいっている。またショッフは，アレクサンドロス大王の遠征によって西方世界に知られたインダス河口の港 Patala に比定している[7]。このように，ミンナガルの位置は明確ではないが，Minnagar の nagar はサンスクリットの「町」を意味する nagara で，また Min という名称は，Isidorus Characensis, 18に Sakastēnē 地方の町の名前として見えているので，スキュティアー系の名称であると考えられる[8]。

次に *Periplus* にはインダス川の7つの河口のうちの真中の河口に，臨海商業地としてバルバリコン Barbarikon があげられている。バルバリコンはギリシア語で「夷狄の(港または町)」を意味しているが，おそらくこの語に発音が類似したこの地方の地名——ショッフはたとえば今日このデルタ地帯に残っている Bahardipur という地名をあげている——をギリシア語化したものと考えられる。プトレマイオスはこの地域の町の一つに Barbarei をあげているが[9]，これはバルバリコンに相当するものと考えられている。この商業地については，インダス河口の中世の大商業地であった Debal Sindhi やカラチに比定するものもあり，またカニンガムは Ghāra クリークの河口にある Bhambūra に比定し，アレクサンドロス大王が建設したとユスティヌスの伝えている町である Barake もこれであるとしている[10]。このように，バルバリコンもミンナガルと同様に，諸説紛紛として，その正確な位置を求めることは困難である。そしてこのことは，インダス河口のデルタ地帯に大きな変化が生じていることによるところが大きいと思われる。

いずれにしても，当時はインダス河口が西方世界の商人の来航する地域の1つであり，*Periplus* には船がバルバリコンに停泊し，「積荷は全部河を通じて首都（ミンナガル——引用者）へ向け王の許に運び込まれる」と記されている[11]。「王の許に運び込まれる」ということが，なにを意味しているかは明らかではないが，あるいは外国貿易についてパルティア系の王がなんらかの規制を加えていたのではないかとも考えられる。なおアレクサンドロス大王の遠征いらい，西方世界に知られていた港で，ショッフがミンナガルに比定したパターラは，*Periplus* には記されていない。しかし，プトレマイオスは Barbarei とならんで，デルタ地帯の町としてパターラをあげており，またデルタ地帯を包括する地方を Patalēnē と呼んでいる[12]。パターラについてもさまざまの比定がなされているが[13]，おそらくこの港も当時は商業地として存在していたのではなかろうか。ただし，*Periplus* に記載されていないので，あるいは当時は西方世界の船舶は寄港しなかったのかも知れない。

Periplus の作者は，インダス河口の記述に続いて，その南方に北に向かって見渡しにくいエイリノン Eirinon 湾があり，そこは「沼地風の湾で動き易い泥砂が陸から遙か遠く迄続いて居るので，陸地が未だ見えぬのに船が座礁し，内側にひっぱられると沈没」してしまうこと，

7) Ptolemaios, VII, 1, 61 ; *McCrindle's Ancient India as Described by Ptolemy*, ed. by S.M. Śâstri, Calcutta, 1927（以下 McCrindle), p. 152 ; *Cunningham's Ancient Geography of India*, ed. by Sastri, Culcutta, 1924（以下 Cunningham), p. 335 ; Schoff, p. 166. このほかスミスは今日の Mansuriyah の西方10キロほどのところにある Bahmanabad (25°50′N., 68°50′E.) に比定している．ここには先史時代の広大な遺跡がある．(Schoff, p. 166 による.)

8) 村川氏，191頁.

9) Ptolemaios, VII, 1, 59.

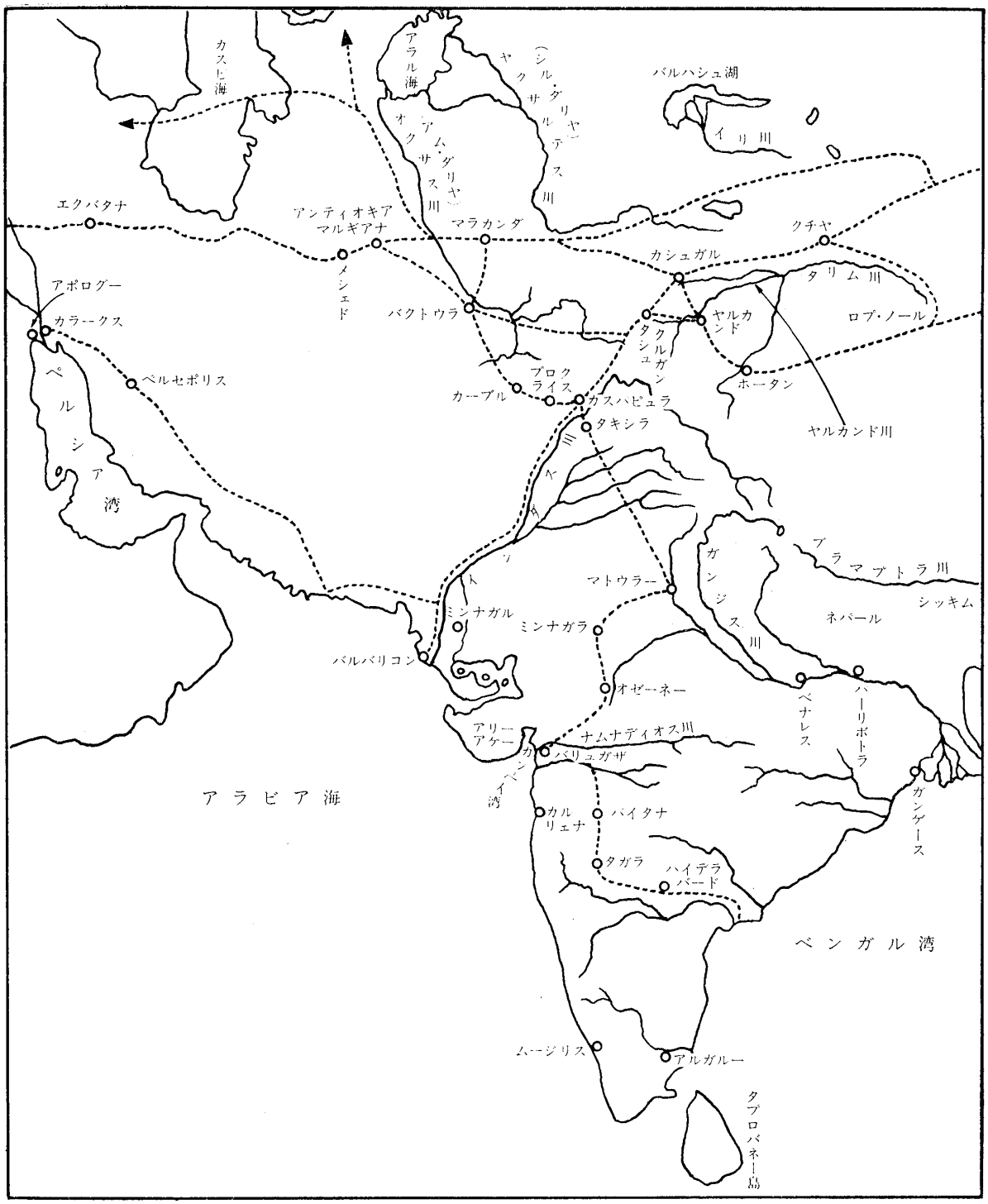
10) 村川氏，190頁；Schoff, p. 165 ; McCrindle, p. 148; Cunningham, pp. 337-39.

11) *Periplus*, 39. 村川氏，105頁.

12) Ptolemaios, VII, 1, 59 & 55.

13) パターラについては，Rennell やスミスは Thaṭṭa に，Droysen, Benfey, Saint-Martin, カニンガム，マックリンドルはハイデラバードに，また Lassen, Wilson, McMurdo はハイデラバード北東90マイルの地点に比定している．(McCrindle, pp. 146-48 ; Cunningham, p. 327.)

第2図　古代のインド・中央アジア（Warmington による）　　(……は交通路)



またこの湾の上には1つの岬があり，それは「エイリノンから東と南へ向かった後西に向かって曲り，七つの島を囲んだバラケースと呼ばれる湾を取り囲んで居る」ことを記し，このバラケース Barakēs湾も波が大きく，渦巻があり，海底もあるところは絶壁をなし，あるところには鋭い岩があって，船舶にとってすこぶる危険な難所であることを，詳細に述べている[14]。エイリノン湾はインダス河口の南方にひろがる，今日 Rann of Cutch と呼ばれる広大な荒地に比定されており，ここは乾期には海水面から10～20インチ（25～50センチ）上に出ているが，雨期になると3フィート（90センチ）ぐらい水

14) *Periplus*, 40. 村川氏，106-107頁；Schoff, p. 38.

をかぶってしまう。この荒地の東側の Nagar Parkar 附近には，古い港の跡が見られ，今日でも南側には Mandavi という港があり，吃水10フィート（3メートル）以下の50トン程度の小さな船舶が，アフリカのザンジバルとの間を往復して，貿易を営んでいる[15]。またバラケース湾は Rann of Cutch の南側に入りこんでいる Cutch 湾であろうとされている。プトレマイオスがあげている Kanthi 湾もこの湾であろうとされており，かれは Kanthi 湾に突き出ている陸地附近の島島を Barakē という名前で記している[16]。これは *Periplus*のバラケースの湾に当るものであろう。

バリュガザおよびその奥地の状況

次に *Periplus*の作者は，これまでしばしば言及したバリュガザ Barygaza およびその附近，ならびにその奥地の記述に移るが，その記述は第41節から第51節までを費やしてすこぶる詳細をきわめ，とくにバリュガザ港へ入港するまでの水路の状況をくわしく述べていて，作者がこの方面の状況を熟知していることがよくうかがわれる。

作者はまずその冒頭で，この地方の一般的状況を次のように書いている。

「バラケースの後にはぢきにバリュガザの湾とアリーアケー地方の海岸となるが，後者はマンバノスの王国と全印度との始まりである。此の地方の中，スキュティアーに境を接する内地の部分はアベーリアーと呼ばれ，沿海地方はスュラストゥレーネーと呼ばれる。此の地方は麦や米や胡麻油や牛酪や綿やこれから出来るありふれた印度木綿を豊富に産する。また此処には極めて沢山の牛の群と体軀頗る偉大で色の黒い人々が居る。此の地方の首都はミンナガラで，此処からまた極めて多量の綿布がバリュガザに運び下される。（中略）此の地方の，即ちバルバリコンからアスタカプラのところのバリュガザに面した所謂パピケー岬迄の沿岸航海は三千スタディオンに上る。」[17]

以上の記述には多数の地名が出てくるが，まずバリュガザについては，プトレマイオスもインド・スキュティアーの東部沿岸地方の記述の中で，「Namados 川の西方の内地にある商業地」として Barygaza 市をあげている。また玄奘（602～64）の『大唐西域記』には跋祿羯呫婆国の名で記され，ここがアジャンター窟院の西方千余里（約320キロ）のところにあり，耐秣陀河を渡ってこの国へ至ること，この国は周囲が二千四，五百里，都城の周囲が二十余里あり，土地は塩分を含んでいて草木はまばらであり，住民は海水を煮て塩をつくり，海を利用して業を営んでいること，気候は暑熱で旋風が巻きおこり，土地の風俗は薄情で，人の性質はいつわりが多く，学芸には関心がないことなどが記されている[18]。バリュガザは通常グジャラート（カーチャワール）半島の南に入りこんでいるカンベイ Cambay 湾の奥近くにある Broach (Bharoach) (21°42′N.,72°59′E.) に比定されている。Broach は Amarakaṇṭaka 山中に発して西方に流れる Narmada (Narbada) 川（プトレマイオスの Namados 川および『大唐西域記』の耐秣陀河はこの川であると考えられる）がカンベイ湾に注ぐ河口から48キロほど上流のところに位置しており，おそらく人工のものと思われる高さ25メートルほどの高みの上に町がある。サンスクリットの文献には Bhārukacchā の名前で出てくる[19]。また上述の引用文に見られる「バリュガザの湾」は，広義にはカンベイ湾と解されるが，湾の入口の Malacca Banks の部分をさしているようであり，第42節のはじめに「北に向って陸に入り込み大波のとゞかぬ別の湾」とあるのが，厳密にはカンベイ湾と考えられる[20]。

15) Schoff, p. 173；村川氏，197頁.
16) Schoff, p. 174；村川氏，197頁；Ptolemaios, VII, 1, 55 & 94；McCrindle, pp. 187-88.
17) *Periplus*, 41. 村川氏，107-108頁.
18) Ptolemaios, VII, 1, 62；『大唐西域記』巻第十一.
19) Schoff, p. 180；村川氏，198頁；McCrindle, p. 153; Cunningham, pp. 374-75. ただし，足立喜六氏は跋祿羯呫婆国をカンベイ湾の一番奥に位置しているカンベイ市に比定している.（同氏著『大唐西域記の研究』下巻，法蔵館，昭和18年，889頁.）
20) 村川氏，108および198頁.

次にアリーアケー Arīakē については，ラッセンはサンスクリットの Larika に相当するものであるとして，南部グジャラートの Nausari-Broach 地方をさしていると考えており，また Bhagwanlal Indraji はこれを Aparāntika と同じであるとして，Thana 地方の北 Konkan に当ると考えている。プトレマイオスはインド・スキュティアーの東部の沿海地方を Larikē の名で呼んでおり，これは上述の Larika に相当するものであろうが，マックリンドルはこれをグジャラートおよび北コンカン地方の古名であるとしている。しかし，プトレマイオスは Larikē, Barygaza 湾に続いて，別に Ariakē Sadinōn という地名をあげているから，アリーアケーはラリケーとは別であるとも考えられる。このようにアリーアケーについてはわからない点が多いが，もともとこの語は「Ārya 人の土地」という意味で，インドのアーリア人がヴィンディア，ヒマラヤ両山脈を南北の境とし，東西の大海に峡まれた地域を Āryāvarta と称したのに由来するともいわれ，*Periplus* の文章からすれば，カンベイ湾の両岸のあたりを，漠然とアリーアケー地方と作者は考えていたようにも思われる[21]。

次に「スキュティアーに境を接する内地の部分」をアベーリアー Abēriā,「沿海地方」をスュラストゥレーネー Syrastrēnē というと，*Periplus* には書かれている。これら2つの地方名については，プトレマイオスも Abiria および Syrastrēnē という地方名を，パタレーネーとともにあげ，これらの三者からインド・スキュティアーが成っていること，Abiria はパタレーネーの上方の地域であり，Syrastrēnē はインダス河口と Kanthi 湾の周辺の地域であると書いている。また『大唐西域記』に記された蘇利佗国はシュラストゥレーネーを指していると一般に考えられているが，この書にはこの国について「国当二西海之路一。人皆資二海之利一。興販為レ業。貨二遷有無一。」と記されていて，この地方が西方世界への海上交通路上に位置しており，海上貿易が盛んであることを伝えている。マックリンドルはプトレマイオスの Abiria はインダス川の東方の地域で，インダス河口のデルタ地帯の上方の地方をさしているとし，またシュラストゥレーネーはサンスクリットの Surāshṭra で『マハーバーラタ』やプラーナがグジャラート半島をこの名称で呼んでいることを指摘しており，カニンガムも同様のことを述べている。いずれにしても，アベーリアーはグジャラート地方の奥地を，シュラストゥレーネーはその半島の部分をさしているものと考えられ，今日カンベイ湾の東岸にある Surat に，後者の古名が残っているとされている。グジャラート地方は，今日でもインドでもっとも豊かな地方の1つで，土壌は肥沃な黒土からなっており，とくに綿の栽培に適しており，また沿岸には多数の港があって，これらの港からこの地方の産物である馬，牛，羊，穀物がインドの各地に送られている。*Periplus* のこの地方の産物に関する記述は，当時においてもこの地方が同様に豊饒な地帯であったことを伝えてくれるわけである[22]。

次にアスタカプラ Astakapra およびそこにあるバリュガザに面したパピケー Papikē 岬については，前者はプトレマイオスもインダス川の東方で，若干離れているところにある町の1つとしてこれをあげており，マックリンドルはこれをブローチ（バリュガザ）の対岸の Bhavnagar に近い Hathab に比定している。また村川堅太郎氏は Goapnath (21°10′N., 72°10′E.) あたりとされている。またパピケー岬はその近くの Goapnath Point に比定されている[23]。

ところでさきほど引用した *Periplus* の記述には，この地方をマンバノス Mambanos とい

21) D.C. Sircar, *Studies in the Geography of Ancient and Medieval India*, Motilal Banarsidas, 1971, p. 224 ; Schoff, pp. 174-75 ; Ptolemaios, VII, 1, 4 & 6 ; McCrindle, pp. 38-39 ; 村川氏，198頁.

22) Ptolemaios, VII, 1, 55 ;『大唐西域記』巻第十一 ; McCrindle, p. 140 ; Cunningham, p. 363 ; Schoff, pp. 175-76 ; 村川氏，199頁.

23) Ptolemaios, VII, 1, 60; McCrindle, p. 150 ; Schoff, p. 181 ; 村川氏，200-201頁.

う王が支配していること，また首都はミンナガラ Minnagara で，そこから多量の綿布がバリュガザに運ばれることが記されている。プトレマイオスも Larike 地方のナマドス川の東にある地名の一つとして Minagara をあげている[24]。ここにいう Minnagara, Minagara は，すでに述べたバルバリコンの上流にある Minnagar と名称を等しくしており，かつどちらも首都とされているが，その地理的位置から考えて，一般に両者は別の都市であると考えられている。マンバノス王の首都とされているミンナガラについても，さまざまの比定がなされており，ユールははるか奥地の山中にあると中世のイスラム史家のマスウーディーが述べている Manekir に比定しており，ミュラーは今日の Indore あたりに求めている。またスミスはプトレマイオスの与えている Minagara の経緯度が，バリュガザのそれよりもそれぞれ2度近く差があるところから，Mandasor あたりに求められようとしているが，その正確な位置は明らかでないといっている[25]。このようにミンナガラの位置については定説がないが，その名称からやはりサカ系の都市であったと考えてさしつかえなかろう。

またこの地方の支配者のマンバノス王[26]は，一般に Nahapāna に比定されている。ナハパーナはサカ系の民族の出身で，クシャン朝に従属していた西部クシャトラパ王朝（Western Kṣatrapas）の支配者であり，はじめは satrap すなわち kṣatrapa の地位にあったが，のちには大サトラプ（mahākṣatrapa）の称号をとり，また自から王（rajā）を称した。かれはサカ族の南方征服地を統治し，その支配領域は Ajmer および Pushkar にいたるまでの南部ラージプターナ，西ゴーツ Ghats 山脈の Nāsik および Poona 地方，ならびにグジャラート半島の広大な地域におよんでおり，その称号の変化から見て，クシャン朝に従属しながらも，しだいに独立性をえていったことがうかがわれる。その年代はまだ十分明らかではないが，スミスは1世紀中ごろと推定している[27]。

Periplus の作者はバリュガザおよびその周辺や奥地の状況を述べたあとで，カンベイ湾と考えられる湾の叙述に移り，湾の入口にバイオーネース Baiōnēs という島があること，湾の最奥部にはマイス Mais という大変大きな川のあること，さらにバリュガザへ航行する船は，バイオーネース島をあとにして，東に向けて約300スタディオンの幅の湾を横ぎって，ナムナディオス Namnadios 川の河口に達することを述べている[28]。上述のバイオーネースの島については，カンベイ湾の入口に近い，グジャラート半島側の Diu 島に比定するものもあるが，通常は湾の中に入った，ナルマダ河口の対岸に近い Piram 島（21°36′N., 72°20′E.あたり）であろうと考えられている。またマイス川はカンベイ湾の一番奥にある，今日のカンベイ市（22°18′N.,72°40′E.）のところで湾に注ぐ Mahi 川に比定されている。またナムナディオス川はすでに述べたナルマダ川であると考えられる[29]。

Periplus の作者は，次いでカンベイ湾からバリュガザへの入港の航路とその航行の困難さについて，すこぶる詳細に述べている。それによれば，バリュガザのところの湾は狭いので，近づきにくい。というのは，右側か左側のどちらか一方の側へかたよることになるのであるが，右側の方はちょうど湾の入口のカンモーニ Kammōni 村のところに，険しい岩だらけのヘーロ

24) Ptolemaios, VII, 1, 63.

25) McCrindle, p. 156；Schoff, p. 180；村川氏，200頁；Smith, p. 221, n. 1.

26) 写本では Mambaros となっている．ショッフは Nambanus としている．(Schoff, pp. 39 & 175.)

27) Smith, p. 221；中村氏，213-14頁．なお中村氏は碑文からナハパーナの年代を119～124年ごろと推定しておられる．そうだとすれば，*Periplus* の成立年代を2世紀のはじめごろに引き下げて考えなければならないか，あるいはマンバノスをナハパーナ以外の人物に比定しなければならないであろう．

28) *Periplus*, 42. 村川氏，108-109頁；Schoff, p. 39.

29) Schoff, pp. 181-82；村川氏，201頁．なおプトレマイオス（VII, 1, 31）はナマドス川に合する川として Mōphis 川をあげており，この川は *Periplus* のマイス川に相当するものとされているが，この川がナマドス川へ合流するというのは，プトレマイオスの誤りであろうと，マックリンドルはいっている．(McCrindle, p.104.)

ーネー Hērōnē という出鼻が横たわっていて，航行が困難であり，他方，左側の方は，すでに述べたアスタカプラの前面のパピケー岬のあたりが，海流のため，また険しい岩からなっている海底が碇を切るために，停泊が困難だからである。しかし，どちらかといえば，左側の方が右側にくらべて航行しやすい。さらにバリュガザのところの河口は，土地が低平で発見しにくく，その上川が浅瀬で，中へ進むことが困難である[30]。

以上はナルマダ河口までのカンベイ湾の航行について述べた部分であるが，河口からバリュガザまでの300スタディオンの距離の航行も，きわめて困難かつ危険であると，*Periplus* には書かれている。それは激しい潮汐の作用によるもので，インドの河川ではどこも「大変大きな引き潮と上げ潮」が見られ，とくに新月と満月の際の3日間が潮の増大が著しく，なかでもバリュガザのところでは潮の干満がきわめて激しくて，「不意に海底が見えたり(時には)陸地の一部が(海となり)，時には暫く前迄は船が通ったところが乾いたりし，河〔の水〕は上げ潮が浸入して来ると全海水が一緒に押し上げられるので，自然の流れに反して激しく幾スタディオンも上手に運ばれる」。とくに新月のころは「夜の上げ潮で海水が押し上げる際には，非常な力が生ずるので，既に入航を開始して海はまだ静かであるのに，河口に在る者に海の方から遠くで聞く軍隊の叫びに似たものが運ばれ，その後間もなく海そのものがざわざわと音立てて浅瀬に突進して来る。」[31]

以上の叙述はまことに精彩に富んだ描写で，実際に経験したことのないものには，とうてい書けない文章であろう。このような激しい潮流は紅海では見られず，西方世界の船乗や商人にはとくに印象深く，また危険に思われたのであろう。*Imperial Gazetteer of India* によれば，春季にはカンベイ湾の大潮の時は，干満の差が33フィート(10.5メートル)に達し，潮も時速6～7ノットで走り，平時でも差は25フィート(7.6メートル)，時速4.5～6ノットであるという[32]。このように潮の干満が激しく，流れも早いので，経験のないものやはじめてこの商業地を訪れるものにとっては，入航も出航もすこぶる危険であると，*Periplus* の作者は述べている[33]。

このようにカンベイ湾の航行も，またそこを通ってナルマダ河口に達してからのこの川の航行も，きわめて困難かつ危険であったので，のちには湾の奥地の港は捨てられて，スラトに中心が移り，さらに今日ではカンベイ湾をはなれてボンベイに中心が移っているのであるが，*Periplus* の書かれたころは，バリュガザが商業地として栄えていたのである。しかし，そこにいたる航行が困難かつ危険であるため，当時は水先案内船が活躍しており，「王に仕へる土人の漁夫たちがトゥラッパガとコテュムバと呼ばれる長い船に人を乗り組ませて，スュラストゥレーネー迄出迎へにやって来て」，西方世界の船舶をバリュガザまで曳船してゆくと，*Periplus* には記されている[34]。トゥラッパガ trappaga は，ラッセンによればサンスクリットの trapāka で，これはこの辺の漁民たちに与えられた名称で，それが船の名になったものらしい。またコテュムバ kotymba については，ショッフは Sir Richard Francis Burton がソマリーランドの港で見た，西北インドから来航した kotia という船に関連づけて考えており，また村川堅太郎氏はサンスクリットの kuṭumba に関連づけられるらしいが，この語の意味する

30) *Periplus*, 43. 村川氏，109頁；Schoff, pp. 39-40. なおカンモーニ村は，プトレマイオスがバリュガザ湾の地名の1つとしてあげている Kamanē (VII, 1, 5) に相当すると考えられ，マックリンドルはナルマダ河口の南方にあるとしているが，Surat のところでカンベイ湾に注ぐ Tapti 川の河口の北西方にある岬の突端あたりをさすものと考えられる．またヘーローネーはこの河口のあたりから北方に続いている浅瀬をさすものと考えられる．(McCrindle, p. 39；Schoff, p. 182；村川氏，202頁.)

31) *Periplus*, 45-46. 村川氏，110-12頁.

32) *Imperial Gazetteer of India*, IX, p. 297. (Schoff, p. 183 および村川氏，203頁による.)

33) *Periplus*, 46. 村川氏，111頁.

34) *Periplus*, 44. 村川氏，110頁.

「家族，親戚」との関連は不明だとされている[35]。このように2つの水先案内船の実態は明らかではないが，インド洋を横断してくる西方世界の船舶を引いてゆく船であるとすれば，相当に大きなものであったろうと思われる。*Periplus*に「長い船」と書かれていることからも，そのように考えられる。また土民の漁夫たちが，王の命令によって水先案内をしているということからすれば，この地方の支配者が西方世界との貿易に重大な関心を持っていたことが推測される。すでに述べたように，インドの支配者はしばしばローマ帝国に使節を派遣しているから[36]，あるいはこれらの遣使を通じて，両者の間に協定が結ばれていたのかも知れない。

それではこのように航行の条件の悪いバリュガザが，当時はなぜ貿易港として栄え，西方世界の商人をひきつけたのであろうか。それはインドの奥地やさらにヒンドゥークシュ山脈を越えたかなたの中央アジアや中国の物産——西方世界の需要するナルドス，その他の香料類，メノウ，その他の貴石類，綿布，絹など——が，多量にバリュガザへ運ばれてきたからである。*Periplus*にはバリュガザの地方には，その東方にオゼーネー Ozēnē と呼ばれる市があり，そこは以前は王宮のあったところであるが，そこから「此の地方の繁栄に役立つものや，また我々の商売に向く品物が総てバリュガザへと運び下される」こと，またプロクライスProklaisからもナルドス，その他のものが運ばれてくることが記されている[37]。

上述のオゼーネーはプトレマイオスも既述のミナガラとならんであげている。Ozēnē はサンスクリットの Ujjayinī（「勝利をえた」という意味）であるとされ，今日の Ujjain市（23°11′N., 75°47′E.）に比定されている。ここはアショカ王が王位につく前，副王として派遣されたところで，またヒンドゥーの聖なる7市の1つとして，古来インドでは著名な都市であり，プトレマイオスはここがTiastanesの首都であると書いている。Tiastanes は貨幣や洞窟寺院の碑文に出てくる Chasṭāna に比定されているが，この人物はサカ系の支配者で，前にあげたナハパーナと同様に，はじめ kṣatrapa の称号をとり，その後mahākṣatrapaとなり，また王（rajā）を称した支配者であった。しかし，マンバノス，すなわちナハパーナとは別の系統に属した人物であったようである。いずれにしても，オゼーネーは早くから西北インドの政治の中心地の一つであり，同時に *Periplus* の記述から，この地方の貨物の集散地として，経済的にも重要な地位を占めていたことがうかがわれ，この町に集められた貨物がバリュガザへと輸送されて，西方世界へ輸出されたのである。『大唐西域記』に記された鄔闍衍那国の都城はカニンガムによってこの町に比定されたが，玄奘はこの国は周囲が六千余里，都城の周囲が三十余里あり，「居人殷盛家室富饒」と書いており，7世紀においてもなお相当に栄えていたことがうかがわれる。古代の都市の廃墟は，現在の都市から1.6キロほど離れたところに存在している。この遺跡は1955年以降 N. R. Banerjee によって発掘され，この都市が不正五辺形の大土塁に囲まれ，西と北は川に沿い，他の3方には濠がめぐらしてあり，また土塁のところどころが切れて通路になっていたことが判明し，道路には古代のわだちの痕跡が残っていた[38]。

またプロクライスはサンスクリットの Puṣkaravati（「蓮に富む」という意味）のプラクリット形である Pukkhalaoti をギリシア語化したものと考えられる。ストラボンがインダス川上流にある都市としてあげている Peukolaitis，アルリアノスが同じあたりの地方名としてあげている Peukelaotis は，プロクライスに相当すると考えられ，またプトレマイオスはガンダーラ地方の都市の一つとして Proklais をあげ

35） Schoff, p. 182；村川氏，202頁.
36） 本稿(2)(『流通経済論集』Vol. 7, No.1) 79-81頁参照.
37） *Periplus*, 48. 村川氏，113頁；Schoff, p. 42.
38） Ptolemaios, VII, 1, 63；McCrindle, pp. 154-55；Smith, p. 232；Schoff, pp. 187-88；村川氏，207頁；『大唐西域記』巻第十一；Cunningham, pp. 560-61；『世界考古学大系』第8巻，『南アジア』，平凡社，昭和36年，100-101頁.

ている。マックリンドルはここがガンダーラの古代の首都で，インダス川の西方に位置しているとして，ペシャワールから17マイル（27キロ）ほどのところにある Hasht-nagar に比定している[39]。*Periplus*にはカスパピュラ Kaspapyra，パロパニソス Paropanisos，カーブルのナルドス，隣りのスキュティアーを通ってくるナルドス，そのほかコストスやブデルラが，プロクライスを通じてバリュガザの海岸へと運ばれてくると述べられている[40]。カスパピュラはヘロドトスの伝えるスキュラクス Skylax のインド洋航海の出発点となったところで，インダス川の上流，今日のパキスタンの Attok（33°53′N., 72°15′E.）に比定されている[41]。パロパニソスはヒンドゥークシュ山脈に比定されている[42]。またカーブルは今日のアフガニスタンのカーブル渓谷をさしており，ここは絹のところで述べるように，中央アジア方面からハイバル Khybar 峠を越えてインドにいたる交通の要衝である。漢籍に見える高附国はこれであるとされており，『後漢書』西域伝には，ここが盛んな商業地で，天竺，罽賓（ガンダーラ），安息(パルティア)の3国がこの地の獲得をめぐって争ったことが記されている[43]。また「隣りのスキュティアー」とは，すでに述べたミンナガルを首都とするパルティア人の支配下にあったサカ族の地方をさしているものと考えられる[44]。以上に述べたところから，バリュガザはインド北部の奥地および中央アジア方面の物産が多量に送られてくる商品の豊かな商業地であったことがうかがわれる。

バリュガザへは以上のほか，中部インドのデカン高原方面やベンガル湾沿岸方面からの物産も運ばれてきた。*Periplus* の作者は，バリュガザの南方にひろがる沿岸地帯をダキナバデース Dakhinabadēs と呼び，この地方の「上手に当り東に向いた内陸」は，荒涼とした地方や高山地帯がガンジス川の流域にいたるまで続いており，そこには豹，虎，象，大蛇，クロコッタス krokottas（ハイエナの一種），ひひなど，さまざまの野獣が生息しており，また多数の人口をもった諸種族が住んでいることを記し，さらにこのダキナバデース地方のもっとも著名な商業地として，パイタナ Paithana とタガラ Tagaraの2つをあげ，前者はバリュガザから20日行程，後者はパイタナからさらに東へ10日行程のところにあり，前者からはすこぶる多量の縞メノウが，後者からは多量のありふれた，また上質の綿布などが，道のないところを車でバリュガザまで運ばれてくること，そのほか「沿岸方面」からもさまざまの品がバリュガザへ運ばれてくることを述べている[45]。

上述のダキナバデースは，「南に向かう道」を意味するサンスクリットの dakṣiṇapatha のプラクリット形である dakkhiṇabadha に当るものと解され，今日のデカン地方をさしているものと考えられる。*Periplus* にはダキナバデースの語の由来として，「彼等の言葉で南はダカノス dakanos と呼ばれるから」と記されているが，デカンという名称はこの dakanos に由来しているとも考えられる[46]。

次にダキナバデース地方の商業地の1つとしてあげられているパイタナは，サンスクリットの Pratiṣṭhāna のプラクリット形である Paiṭṭhāṇa に当るものと考えられ，プトレマイオスがアリーアケー地方の内地の記述の中で，後述のタガラとともにあげている Baithana は，こ

39) Strabon, XV, 1, 27 ; Arrianos, *Anabasis of Alexander*, IV, xxii ; Ptolemaios, VII, 1, 44 ; McCrindle, pp. 116-17 ; 村川氏，205頁 ; Schoff, pp. 183-84. なおショッフはプロクライスを Poclais としている.

40) *Periplus*, 48. 村川氏，113頁 ; Schoff, p. 42.

41) Herodotos, IV, 44 ; Schoff, p. 189 ; 村川氏，208頁.

42) Schoff, p. 189 ; 村川氏，208頁. なおストラボンはインド北境の山脈として Paropamisos をあげ，土民はこれを別に Emodos または Imaos とも称し，マケドニア人は Kaukasos と称すると書いている.（Strabon, XV, 1, 11.）

43) Schoff, p. 190 ; 村川氏，208-209頁.『後漢書』巻八十八，西域伝，高附国の条には，次のように記されている.「高附国在二大月氏西南一。亦大国也。其俗似二天竺一而弱易レ服。善二賈販一内富二於財一。所レ属無レ常。天竺・罽賓・安息三国強則得レ之。弱則失レ之。而未三嘗属二月氏一。……後属二安息一。及三月氏破二安息一。始得二高附一。」

44) Schoff, p. 190.

45) *Periplus*, 50-51. 村川氏，114-15頁 ; Schoff, p. 43.

46) *Periplus*, 50. 村川氏，115および215頁 ; Schoff, pp. 43 & 195.

れに相当するものとされている。プトレマイオスはここが Siroptolemaios または Siropolemaios の首都であると書いている[47]。ここは通常今日の Paiṭhān (19°28′N., 75°24′E.) に比定されている。パイターンはハイデラバード地方の都市で，Godaveri 川上流の左岸に位置している，デカン地方の最古の都市の1つである。またこの都市にいるとプトレマイオスが書いている Siroptolemaios (Siropolemaios) は，アンドラ王朝の Pulumāyi 2世 (Śrī-Pulōmāvit) に比定されている。この王はすこぶる強勢を誇った Gautamīputra 王の子で，父のあとをついで王位についた人物で，28年間統治したが，大サトラプであった義父の Rudradāman 1世と2度戦って敗北したことが知られている。スミスはかれが義父と戦って敗北したのは，紀元130年以前のことであったろうと推定し，また中村元氏はかれが130年以後に即位し，154年以後まで統治したらしいと述べておられる[48]。

またパイタナから東へ10日行程のところにあると書かれているタガラ——プトレマイオスはこれを Baithana の北東方においている——については，多くの学者によってさまざまのところに比定されているが，G.F.フリートはサンスクリットではgとyがしばしば置きかえられるので，Tagara は Tayara になるとして，Tagara——→Tayara——→Ter と変化したと推定し，タガラを今日の Ter (Thair) (18°19′N.,76°9′E.) に比定した。ショッフや村川堅太郎氏はこれを採用しておられる。テールはパイターンの南東150キロほどのところにあり，*Periplus* に述べられた日程および方向と大体において一致しているといってよかろう[49]。

なおさまざまの品物をやはりバリュガザへ送りこむと *Periplus* に記された「沿岸地方」は，西海岸ではなくて，東側のベンガル湾沿岸をさすものと考えられている。上述のフリートは，ベンガル湾沿岸の Masulipatam (16°11′N., 81°8′E.) および Vinukonda (16°3′N., 79°44′E.) から発する2本の道路が，ハイデラバードの南東40キロのところで合し，それから Tēr, Paithān, Daulatābād を経て Mārkinda に達し，そこから西ゴーツ山脈を通ってバリュガザにいたっており，これがアンドラ王朝の主要な交通路であったとし，この交通路によってベンガル湾沿岸や奥地の物産がバリュガザに送られてきたのであり，道のないところを大変な距離にわたって車で貨物が送られると，*Periplus* に書かれている交通困難なところは，この道路の終りに近い西ゴーツ山脈を通過する部分であると推定している[50]。

以上に述べたところによって，*Periplus* の書かれたころは，バリュガザは西北インドや中央アジア方面からばかりでなく，中部インドのデカン高原地方やその東方のベンガル湾沿岸方面からの物産も多量に集まってきたことが推測され，これらのものを求めて西方世界の船舶が来航する，西北インド最大の商業地であったということができよう。したがって，外海からこの商業地にいたる水路が，たとえどれほど危険であり，航行が困難であったとしても，季節風を利用して広大なインド洋を横断してくる，大胆でしかも利得の追求に余念のない西方世界の商人を，くじけさせることはなかったといってよかろう。

バリュガザ以南の状況

Periplus にはバリュガザ以南の「地方的な商業地」に関する記述も見られる。その第1にあげられているのはスーッパラ Sūppara である。プトレマイオスも Arīakē Sadinōn 地方の地名の1つとして，Soupara をあげている。ラッセンはこれをカンベイ湾内の Surat に比定したが，マックリンドルは Sūpara (Sopara) (19°25′N.,

47) Ptolemaios, VII, 1, 82.

48) Schoff, p. 195；村川氏, 215-16頁；McCrindle, pp. 176-77；Smith, pp. 231-32；中村氏, 219および222-23頁.

49) J. F. Fleet, "Tagara : Tēr," (*Journal of the Royal Asiatic Society*. 1901, pp. 537-52) (Schoff, p. 196；村川氏, 216頁による.) なおマックリンドルはタガラの比定についての諸説を詳細に紹介している. (McCrindle, pp. 177-78.)

50) Schoff, p. 196および村川氏, 216頁による.

72°41′E.）に比定し，ショッフや村川氏はこれを採用しておられる。ここはボンベイ北方のBesseinからさらに10キロほど北方に位置したところで，古くは貿易の一大中心地で，かつこの地方の首都であったこともあり，ここの古代の廃墟からはアショカ王の詔勅を刻した玄武岩の破片や仏教のストゥーパなどが発見されている[51]。しかし，*Periplus*の書かれたころはすでに繁栄期は終って，地方的な商業地となっていたことが，その記述からうかがわれるわけである。

*Periplus*にはスーッパラの次の地方的商業地として，カルリエナKalliena市があげられている。Kalliena はサンスクリットの Kalyāṇa（「祝福された」という意味）に相当する語で，プトレマイオスはこれを記載していないが，アンドラ王朝の重要な港であったと考えられ，また6世紀のコスマスKosmas Indikopleustesもここがセイロン島と交易を行ない，銅，ゴマの木sesame-logs，衣服を輸出する一大商業地であると書いている[52]。しかし，*Periplus*の書かれたころは，衰微して地方的な商業地に転落してしまっていたのである。ここはボンベイのすぐ近くの Kalyāna（19°14′N., 73°10′E.）に比定されている[53]。さきに述べたベンガル湾沿岸からタガラ，パイタナを経てバリュガザにいたるアンドラ王朝の交通路は，本来はカルリエナにいたるものであったと考えられ，この方はバリュガザへの通路とは異なって，交通にそれほど困難ではなかったようである[54]。

このようなカルリエナの衰退は，この地方の政治情勢の変動と関係があったものと考えられる。このことは*Periplus*の作者がカルリエナについて，ここは「老サラガノスの時代に法律で定まった商業地となった。〔然し今はさうでないが〕，それはサンダネースが此処を取って以来〔港が〕大いに妨害されたからである。と言ふのは偶々これらの場処に入港したヘルレーネスの船は護衛つきでバリュガザに連れられるから」と述べていることから推測される[55]。しかし，この文章に出てくる人物の比定については，さまざまに意見がわかれており，それによってこの文章の意味するところも異なって解されるのであって，この文章が実際にどのような事情を述べたものかを明らかにすることは困難であるが，ショッフが従来の所説を勘案して到達した解釈が，比較的真相に近いように思われる。ショッフは，上述の引用文に出てくる老サラガノス Saraganos を，おそらく紀元44～69年ごろ支配したアンドラ王朝第16代の王 Arishta Sātakarni に，またサンダネース Sandanēs を83～84年に王位にあったと考えられる第20代の王 Sundra Sātakarni に比定する。ところでアンドラ王朝では，王位継承者は王位につく前に，さきに述べたパイタナで副王として統治するのが習慣になっており，パイタナの副王は王のあらゆる機能を行使し，西部沿岸地方に出される布告は，すべて副王の名で出されたもののようである。ショッフが老サラガノスに比定した Arishta は，25年間という長期にわたって王位にあった有力な王であったと考えられるが，かれの治世のあとでは5代にわたって，いずれも5年ないし半年という在位期間のすこぶる短かい王が続き，サンダネースと考えられる Sundra は，そのうちの4番目の王で，わずか1年しか在位しなかったと考えられる。このような在位期間の短かい王たちが，次々に王位についたということから，これらの王たちが微力であったことが想像される。ショッフはこのような前提に立って，*Periplus*の上述の引用文の前半の部分は，老サラガノスがパイタナで副王であった時，すなわち紀元44年より前に，カルリエナを法定の商業地に指定して，この港の繁栄をはかったことを述べたものと推定した。ま

51）*Periplus*, 52；Ptolemaios, VII, 1, 6；McCrindle, p. 40；Schoff, p. 197；村川氏，216-17頁.

52）*Periplus*, 52；*The Christian Topography of Cosmas, an Egyptian Monk*, tr. by J. W. McCrindle, The Hakluyt Library, p. 366. なおゴマの木は西部インドなどに産する硬質の良材と考えられる．このことについては，本稿(4)（『流通経済論集』Vol. 8, No. 1），62頁参照.

53）Schoff, p. 197；村川氏，217頁.

54）Schoff, p. 196.

55）*Periplus*, 52. 村川氏，116頁.

た後半の部分については，Arishtaのあとで微力な副王が次々に続いたので，サンダネースが登場したころは国力が相当に衰えており，バリュガザを支配しているサカ系の支配者にとって，カルリエナに攻撃を加えたり，その貿易を停止させたりすることは，それほど困難ではなかったと考えられるので，後半の部分はサンダネースが副王であった時，北方のサカ族の支配者によってカルリエナが攻撃され，貿易が停止または妨害されている状態を述べたものと推定したのである。なおショッフは *Periplus* の成立年代を紀元60年ごろと考えたので，サカのカルリエナに対する攻勢は，マンバノス，すなわちナハパーナがオゼーネーでサトラプとなる以前，Surāshtra すなわちスュラストゥレーネーで知事をしていたころのことと考えることができるが，かれの前任者の時のこととする方がいっそうふさわしいであろうと述べている[56]。

このようなショッフの見解に対しては，とくに人物の比定について異論が出されている。たとえばスミスは，アンドラ王朝の第16代の王は Arishta Sātakarni ではなくて，Arishṭakarṇa であり，サラガノスはこの王朝の第3代の王，すなわち前2世紀中ごろの Sātakarṇi であろうとしており，また，第20代の王は Sundara Sātakarṇi であるが，かれはサンダネースをこの王に比定しないで，これをサカの役人であろうと推定している。すなわち，スミスの解釈によれば，サンダネースはサカの指揮官としてカルリエナ市に攻撃を加え，その繁栄を奪ったということになるのである[57]。またショッフの人物の比定を受けいれるとしても，かれはサカのカルリエナへの進出をサンダネースが副王であった紀元60年ごろのこととしているが，Arishta Sātakarni より4代あとで紀元83年に王位についたとされるかれが，そのころパイタナで副王であったとするのは，年代的に無理があるように考えられる。むしろかれが副王であったのは王位につくより数年前程度のことと考えた方がふさわしいように思われる。しかし，そのように考えると，*Periplus* の成立年代もショッフが考えた紀元60年よりあとのこととなり，70年代の末から80年代のはじめごろに成立年代を求めなければならなくなるであろう[58]。

この問題に関しては，その後シルヴァン・レヴィが新たな研究を発表している。かれはサラガノスをサータカルニ，すなわちアンドラ王朝の王とし，またマンバノスをナハパーナとしている点では，従来の見解と異ならないが，サンダネースをクシャン朝のカニシカ Kaniṣka 王に比定するという，まったく新しい見解を示している。かれは Sandanēs をサンスクリットの candana（香木の「檀」という意味）の音訳であるとし，Candana（漢訳音「栴檀」，「栴陀那」）が devaputra（天子）と結合して「栴檀天子」の語がうまれたことに注目し，さらに栴檀の名がカニシカ王に加えられていることを根拠として，サンダネースをカニシカ王に比定したのである。クシャン朝の領土は，インドではインダス河岸からガンジス河岸にいたる地方に限られるというのが，従来の通説のようであるが，レヴィはそれより南方の西ゴーツ山脈もその支配下に入ったと主張し，上述の *Periplus* の記事は，クシャン朝の領土拡張に伴って生じた事件を述べたものであると推定したのである[59]。しかし，クシャン朝の領土がカルリエナまでおよんだというのは，考えられないようである。またカニシカ王の年代については，従来盛んに論議されてきたが，いまだに定説というものはない。一説によれば，紀元78年にはじまるシャカ暦は，カニシカ王の創設になるものとされているが，これは今日一般の支持をえておらず，多くの学

56) Schoff, pp. 197-200；村川氏，217-18頁.
57) Smith, pp. 226 & 231-32.

58) J. Innes Miller はこのように考えて，*Periplus* の成立年代を，紀元79-84年ごろと推定している.（Miller, *The Spice Trade of the Roman Empire*, Oxford. 1969, p. 17.）（このことについては本稿〔1〕『流通経済論集』Vol. 6, No. 4, 43頁，注86参照.）なおショッフはのちに *Periplus* の成立年代を79-80年に修正している.（本稿〔1〕. 42頁，注83参照.）
59) Sylvain Lévi, "Kaniṣka et Satavāhana, deux figures symboliques de l'Inde au première siècle (*Journal Asiatique*, CCXXVIII, 1936.)—村川氏，219-20頁による.

者は2世紀の前半から中葉，もしくは3/4世紀ぐらいと考えているようである[60]。したがって，カニシカ王を2世紀の人と考えれば，レヴィ説では *Periplus* の上述の記事も2世紀のことを述べたことになるわけである。これは *Periplus* の成立年代と矛盾することになるであろう。

このように，*Periplus* のカルリエナ市に関する記事については，今日なお結論がえられていない。しかし，この書にはここが地方的商業地と記されており，かつここへ入港する西方世界（ヘルレーネス）の船舶は，護衛つきでバリュガザへつれてゆかれると書かれているので，当時バリュガザを支配していたサカ系の支配者が，従来アンドラ王朝の支配下にあったカルリエナに勢力を延ばし，この港市の貿易を停止させて，バリュガザがこれにとって代って繁栄していたと推測することができるであろう。奥地のデカン高原やベンガル湾沿岸の物産が，輸送の比較的容易なカルリエナへ運ばれないで，わざわざ交通困難な西ゴーツ山脈を抜けて，バリュガザへ運ばれてくるというのも，このような政治情勢の変動によっておこった現象であると考えてもよさそうである。

Periplus の作者はカルリエナの南方にも，7つの地方的な商業地を次々にあげている。すなわち，セーミュルラ Sēmylla，マンダゴラ Mandagora，パライパトゥマイ Palaipatmai，メリゼイガラ Melizeigara，ビュザンティオン Byzantion，トガロン Togaron，テュランノス・ボアス Tyrannos Boas がこれである。セーミュルラは Chaul(18°30′N., 73°E. あたり）に，マンダゴラはサーヴィトリー河口の Bankot (17°59′N., 73°3′E.) 付近に，パライパトゥマイは Bankot の南方の Dābbol などに，メリゼイガラは Jaigarh (17°17′N., 72°13′E.) に，ビュザンティオンは Vijayanta (16°33′N., 73°20′E.) に，トガロンは Dewgur (16°23′N., 73°22′E.) に，テュランノス・ボアスは Malvan (16°3′N., 73°28′E.) に比定されている[61]。以上のうち，Jaigarhに比定されたメリゼイガラは，プリニウスがインド航路発展の第3段階で，アラビア半島のシュアグロス岬，すなわちラス・ファルタクからインド洋を横断してインドのシゲルス Sigerus 港に達すると書いているシゲルスに当るものと考えられている[62]。以上の7つの商業地は，いずれも地方的な性格のものなので，当時は土着の商人の取引地であって，西方世界の船舶の寄港するところではなかったものと考えられる。

Periplus にはこれらの商業地のほか，南西部のマラバール地方の沿岸にいたるまでに，いくつかの地名や島名があげられている。そのなかにはとくに「海賊」がいると書かれているカイネイタイ Kaineitai の島も見られるが，この島はゴアの南方の St. George 諸島 (15°15′N., 73°45′E.)あたりか，これよりもっと南方の Oyster Rocks (14°49′N., 74°4′E,) に比定されている[63]。このあたりはすでに西北インドからずっと南に下って，マラバール地方に近い中部インドの沿岸であるが，このあたりの海域は古来海賊の多いところとして知られていた。プリニウスはインドにおもむく船舶は，海賊が跳梁するので，その防衛のために射手を乗せてゆくと書いている[64]。いずれにしても，*Periplus* の作者は，カルリエナ市以南の地域については，マラバール沿岸にいたるまでは，地方的な商業地やそのほかの地名，島名などを羅列しているだけにすぎず，西方世界の船舶が貿易のために寄港する港は，当時はなかったものと考えてさしつかえなかろう。

これまで述べたところによって，*Periplus* の

60) カニシカ王の年代については，中村氏，182頁以下に詳細な解説がある．それによれば，ギルシュマンは144-73年とし，インドのディクシトは144年ごろから164年ごろまでとし，マーシャルは128-51年，ステン・コノウは129-52年としている．中村氏はいちおうステン・コノウの説を採用しておられる．

61) *Periplus*, 53. Schoff, pp. 200-202；村川氏，221-22頁．ただし，これらの地名の比定については，まだ意見の一致を見ていないものもある．

62) Plinius, *N.H.*, VI, xxvi, 101. なお本稿(1)，40頁参照．

63) *Periplus*, 53. Schoff, p. 202；村川氏，222頁．

64) Plinius, *N. H.*, VI, xxvi, 101.

書かれたと考えられる，おおまかにいって1世紀の後半には，西方世界の船舶が来航したのは，西北インドではバルバリコンおよびバリュガザの2つの商業地であり，なかでもバリュガザがその中心であったと考えられ，それより南方の中部インドの西海岸には，かれらは寄港しなかったといってさしつかえなかろう。バリュガザの南方のカルリエナ市には，あるいは以前は西方世界の船舶が来航して，取引を営んだのかも知れないが，当時はここへ入港する船舶は，サカの船舶によってバリュガザへつれてゆかれ，カルリエナで取引することは許されなかったのである。西方世界の船舶が，しばらくはシゲルスでインドの沿岸に到達してから，沿岸ぞいに南インド方面におもむいていたのが，結局は中部インドの沿岸を避けて，直接南インドへ直航するようになったのは，マラバール沿岸の商業地にかれらの求める商品が多量に見出されたことが，その最大の原因であろうが，中部インドの沿岸にかれらの寄港する商業地がなかったことも，その一つの原因であると考えることもできよう。

輸出品

次に西北インド沿岸の商業地では，どのような商品の取引が行なわれたのであろうか。*Periplus* にはこの地方ではバルバリコンとバリュガザのところに，貿易品の記載がある。そのほかすでに触れたように，沿岸地帯や奥地の物産とそれらの沿海取引地への輸送についても，記述されている。しかし，これらの物産の多くは，穀物その他の農産物などを除いて，2つの商業地の輸出品の中におおむね含まれているので，ここでは貿易品としてあげられているものについて考察を加えることとする。

まず輸出品としては，次のものがあげられている。

バルバリコン——コストス kostos，ブデルラ bdella，リュキオン lykion，ナルドス nardos，カルレアノス kalleanos 石，サッペイロス sappheiros，セーレス Sēres の毛皮，綿布，生糸，黒色インディゴ indigo[65]。

バリュガザ——ナルドス，コストス，ブデルラ，象牙，縞メノウ，メノウ，リュキオン，さまざまの木綿，絹布，モロキノン molochinon，糸，長胡椒，他の商業地から運ばれた品々[66]。

以上の輸出品のうち，まずコストスはどちらの商業地からも輸出されているが，この語はサンスクリットの kuṣṭha(「地中に立った」という意味)に由来し Saussurea lappa という，背の高い強じんな草本の根である。この植物はカシュミールの渓谷の湿潤な斜面の標高8～9,000フィート（2,400～2,700メートル）のところに自生し，また北インドの Chenab 川や Jhelum 川の流域でも10,000～13,000フィート（3,000～3,900メートル）のところに自生している。ワットによれば，この根の採集はカシュミールでは国家の専売で，これを乾燥させ，小さく切って，カルカッタやボンベイに出荷するという。古代においても，おそらく同様に乾燥させ，小さく切って，バルバリコンやバリュガザに輸送されたのかも知れない。その根は苦味があるが，甘い香気もあって，肉桂に類似しているという。ローマではこれが薬剤として使用され，また調味料や香膏の製造にも用いられ，中国では焚香としても用いられた。プリニウスはこれがインダス河口のパターラに見出され，黒と白の2種類があるが，白い方が良質であり，その価額は1ポンド5.5ディナリーであると書いている[67]。両商業地から輸出されるということは，もちろん産地のカシュミールや北インドの奥地から，これらの場所へ運ばれてきたものであろう。

ブデルラも両商業地から輸出されている。こ

65) *Periplus*, 39. 村川氏，106頁.
66) *Periplus*, 49. 村川氏，114頁.
67) Sir George Watt, *The Commercial Products of India, being an Abridgement of the Dictionary of the Economic Products of India*, London, 1908 〔reprint, New Delhi, 1966〕（以下 Watt), p. 980 ; Schoff, pp. 168-69 ; E. H. Warmington, *The Commerce between the Roman Empire and India*, Cambridge, 1928（以下 Warmington), pp. 197-98 ; 村川氏，192頁；山田憲太郎氏著『東西香薬史』，福村書店，1957，64-65頁；Plinius, *N. H.*, XII, xxv, 41.

れは没薬や乳香に類似の芳香を発する樹脂で，西北インド，ベルチスタン，アラビア，東アフリカに産すると，ショッフはいっている。プリニウスは純粋なものの価額は，1ポンドにつき3ディナリーとしている。これについては，すでにパルシダイ地方の産物について述べた時に触れたので，詳細はその方へ譲ることとする[68]。

リュキオンも両商業地から輸出されている。ワットによれば，これはヒマラヤ山地の6,000～10,000フィート（1,800～3,000メートル）のところに自生するBerberis Linn.という植物で，その根および幹から黄色の染料がえられ，今日でもインドでもっとも優秀な黄色染料の1つである。しかし，この植物の主たる用途はむしろ薬剤にあったようで，幹，実，および根の皮から抽出した液汁が眼病に効果があるという。またプリニウスは一種のとげのある灌木の根を煎じると，lycium(lykion)という薬剤がえられること，なかでもインドのリュキウムが最上であり，これはすこぶる苦い枝や根をこなごなにくだいて，蜂蜜の濃さになるまで水で煮，これに苦い果汁やオリーブ油のかすや牛の胆汁を加えて製する，これは眼病に効き，また顔のしみとりや疥癬，その他さまざまの病気の治療に効果があることなどを記している。かれはまた別のところで，小アジアのリュキアにもリュキウムを産すると書いている。リュキオンという名称は，おそらくこのように小アジアのリュキアで産すると考えられたことから，つけられたのかも知れないが，このことはリュキオンがかつて陸路でリュキアを経て西方世界へ送られていたことによるのかも知れない[69]。

ナルドス（英語のnard）も両商業地から輸出されている。すでに述べたように，*Periplus*にはカスパピュラやパロパニソスやカーブル産のナルドスが，プロクライスを通って海岸地方へ運ばれ，また隣りのスキュティアーを通っても運ばれてくることが記されている。そのほか*Periplus*には第56節および第63節に「ガンゲース産」，すなわちガンジス川地方のナルドスが，リミュリケーLimyrikē地方の港から輸出されることが書かれている。リミュリケーはインド南西部の沿岸，すなわち当時はタミール人Tamirsの小国家の併立していたマラバール地方をさしていると考えられる[70]。

ナルドスはサンスクリットのnaladaに由来する語で，西方世界では香油や香膏の賦香料として珍重され，また薬剤や調味料として用いられた。旧約聖書の『ソロモンの雅歌』には，「王がその席に着かれたとき，わたしのナルドスはそのかおりを放った」と記されている。テオプラストスはナルドスがインドからもたらされると記し，またアルリアノスはアレクサンドロス大王の遠征軍がインドから帰還の途中，ゲドゥロシアでブデルラとともにこの植物を多数見出し，従軍していたフェニキア商人がその根を採取したが，大部分は軍隊がふみにじってしまったので，あたり一面に芳香を放ったことを書いている。このような記述から，ナルドスがかなり早くから西方世界に知られていたことがうかがわれる。またプリニウスもナルドスについて詳細な記述を残しているが，それによれば，ナルドスは灌木で，その根は油を含んでいるがもろく，グラディオラスのようなかびくさいにおいがし，味は辛い，葉は小さくて群生しており，若枝は延びて先が穂状を呈している，またガンジス川地方でもナルドスを産するが，これ

68) Schoff, pp. 163-64；Plinius, *N. H.*, XII, xix, 36; 本稿(4), 61頁参照.

69) Watt, p. 130；Schoff, p. 169；Warmington, pp. 205-206；村川氏，192頁；Plinius, *N.H.*, XXIV, lxxvi, 124-lxxvii, 127 & XXV, xxx, 67.

70) リミュリケーについては，プトレマイオスもタミール地方の地方名としてあげている.（VII, 1, 8). しかし，ラッセンはインドの古典にこの名称が見られないとしているが，コールドウェルはローマ帝国時代につくられたと考えられるPeutingerの地図に，ちょうどリミュリケー地方が位置しているあたりにDamirikeと記されており，この語は「タミール人の国」と解されるので，LimyrikēはDymirikēの誤写で，Damirikeを現わしたものであると考えた．ショッフはこれに従っている．しかし，村川堅太郎氏はプトレマイオスがLimyrikēを記載しており，またDとLは音が似ているので，*Periplus*の作者は当時の人々が発音していた通りのままに写した可能性があるとして，Limyrikēの形を採用しておられる.（McCrindle, p. 49；Schoff, p.205; 村川氏，223-24頁．なお本稿〔1〕，40頁，注73参照.）

はozeanifidosと呼ばれる別の種類である，混ぜものをしないナルドスは，その重量の軽いこと，赤っぽい色，甘い香り，とくに口を乾燥させて快い香りを残す味によって識別することができる，その価額は1ポンド100ディナリーで，またその葉を大きく巻いたもの（hadrosphaerum）が40ディナリー，中ぐらいに巻いたもの（mesosphaerum）が60ディナリー，小さく巻いたもの（microsphaerum）が75ディナリーである，あらゆる種類のナルドスが快い香りを放ち，良質のものは色がほかのものより黒みがかっている，このほかシリア，ガルリア，クレタ島産のものもある，ガルリア産のものはインドのものと大差はないが，価額ははるかに安くて3ディナリーである，ことなどを書いている。新約聖書にもナルドスの記載が見られる。たとえば『マルコによる福音書』には，イエスがベタニヤでらい病人のシモンの家にいて食卓についておられたとき，「ひとりの女が，非常に高価で純粋なナルドの香油が入れてある石膏のつぼを持ってきて，それをこわし，香油をイエスの頭に注ぎかけた。すると，ある人々が憤って互に言った。『なんのために香油をこんなにむだにするのか。この香油を三百デナリ以上にでも売って，貧しい人たちに施すことができたのに。』そして女をきびしくとがめた」ということが記されている[71]。この記事からもナルドスが香油として使われ，しかも非常に高価なものであったことを知ることができよう。

ナルドスはCymbopogon schoenanthus (ginger grass)という，西部パンジャーブ，シンド，ベルチスタン，およびイランに自生する草本の根——プリニウスがいっているように，葉や若枝の穂ではなく——から抽出した油である。これに類したものに東部パンジャーブや旧United Provinces すなわち北インドのUttar Pradesh 地方に自生するC. jawarancusa という草本があり，これからもナルドスがえられ，むしろこの方が量が多いと，ワットはいっている。このほかヒマラヤ山中のGarhwal 以東の地およびシッキムの標高17,000フィート（5,200メートル）のあたりに自生するNardostachys jatamansi の根径からえられるものにspikenardがあり，これは芳香を発し，味は苦く，ワットはインドではこれが薬剤として広く使用され，毛髪の成長と黒さを増すのに効果があると信じられていると述べている。ショッフは*Periplus*に記されたバリュガザから輸出されるナルドスは，このspikenardではなかろうかと推測している。ウォーミントンも，バリュガザから輸出されたナルドスには，spikenardが含まれていたと考えている。これに対して村川堅太郎氏は，ショッフの所説を斥け，プロクライスを通ってバリュガザへ運ばれるナルドスは，カスパピュラ，パロパニソス，およびカーブル産のものと考えられるので，これらの地方はすべてGarhwalより西方の地帯であって，ワットのいうNardostachys jatamansi ではないので，バルバリコンおよびバリュガザの両商業地から輸出されるナルドスは，いずれもその種類を判別することはできないと述べておられる。いずれにしても，ナルドスにはさまざまの種類があったらしく，それらが海陸の両路を経て，早くから西方世界に送られていたものと考えられる。山田憲太郎氏はこのような輸送状況から，「原産地以外の主要な中継地が産地ともされ，この間に類似品と偽和品の混入もあったはずで，*Periplus*に記されたナルドスの産地はこのような意味に解すべきであろう」と述べておられる[72]。

次にカルレアノス石はバルバリコンだけで輸出されているが，これはプリニウスの記しているcallainaという石に相当するものとされている。かれはこの石が薄緑色で，インドのかなたの後背地であるCaucasus（ヒンドゥークシュ），Hyrcania（カスピ海南岸地方），Sacae，およびDahaeに産し，すこぶる大型であるが，穴や

71）『雅歌』1章12節；Theophrastos, *Enquiry into Plants*, IX, vii, 2；Arrianos, *Anabasis of Alexander*, VI, xxii；Plinius, *N. H.*, XII, xxvi, 42-45；『マルコによる福音書』14章3-5節.

72）Watt, pp. 461-63 & 792；Schoff, pp. 170 & 188-89；Warmington, pp. 194-95；村川氏，192-93頁および207-208頁；山田氏，前掲書，143-45頁.

きずがあると書いている。ショッフやウォーミントンは，これをトルコ玉としており，ショッフは turqoise と訳している。トルコ玉はイラン東部のホラサン地方に産し，とくにニシャプール北方の Maaden 附近に産するものがもっとも美しく，カーブル渓谷を通って，インダス川をバルバリコンに運ばれたものと考えられる。中世のレヴァント商業を研究した W. ハイドも，トルコ玉はケルマンおよびホラサンに多量に産し，とくにニシャプール附近にもっとも良質のものが見られるといっているほか，オクサスおよびヤクサルテス川上流の山地にも産し，それらはフェルガーナおよびバダフシャンの名前で知られていたといっているから，中世になってもこの方面のトルコ玉が採掘され，ヨーロッパへ送られていたことが知られる[73]。

サッペイロスもバルバリコンだけで輸出されている。これは名称からはサファイヤーと考えられやすいが，サファイヤーは南インドおよびセイロンの産物であって，それがバルバリコンから輸出されたとは考えられない。プリニウスの記載している sappiri が，サッペイロスをさしていると考えられる。プリニウスはこの石は色が青く，まれに紫色を呈することもあること，その最良のものはメディア，すなわちイランに産し，色は不透明で，結晶の部分を含んでいるので，彫刻には不適当であると書いている。それでサッペイロスは通常サファイヤーではなくて，ラピス・ラズリであるとされている。この石は早くから装飾用および群青(ぐんじょう) (ultra-marine) という顔料として用いられ，とくに古代エジプトでは建造物の装飾として盛んに用いられた。その産地は中央アジアのボハラ地方で，とくにバダフシャンのものが著名であると，ハイドはいっている。おそらく上述のカルレアノス石と同じ経路で，バルバリコンに運ばれたのであろう[74]。

次にバルバリコンの輸出品に見られるセーレスの毛皮 *Σηρικὰ δέρματα* については，プリニウスも「あらゆる種類の鉄のうち，セーレスのものが最上で，かれらはこれをかれらの織物および皮とともに送ってくる」と述べ，また別のところで「皮のうちもっとも高価なものは，セーレスの染めた皮である」ともいっている[75]。ところでここにいうセーレス Sēres は，古典作家たちによってしばしば言及されており，それはアジア大陸を陸路東方に横断した奥地の地方をさすものと，漠然と考えられていたようである[76]。たとえば，1世紀中葉の人と考えられるポンポニウス・メラは，アジアのもっとも遠い東には，インド人，セーレス人，およびスキュティアー人が住んでいる，そのうちインド人とスキュティアー人がそれぞれ南端と北端を占め，セーレス人がその中央を占めていると書いている。またプリニウスはスキュティアー人のはるかかなたに海上に突き出ている Tabis という山脈があり，北東に面する海岸を半分ほどいったところに，人の住む地方があって，その最初の人々をセーレス人といい，かれらは森からとれる羊毛のようなもので有名であると書いている[77]。

Sēres という語は中国の西辺で絹の売買を仲介するアルタイ語族の人々が，絹を呼んだ語(絹はモンゴル語で Sirghek，満州語で Sirge という)に由来するとされているが，その地域はこのようにアジア大陸の東方の地域を漠然とさし

73) Plinius, *N. H.*, XXXVII, xxxiii, 110; Schoff, p. 170; Warmington, pp. 255-56; 村川氏, 193頁; W. Heyd, *Histoire du commerce du Levant au moyen-âge*, IIme reimpression, Leipzig, 1936, t. II, p. 653. マルコ・ポーロもケルマンにトルコ玉を多量に産することを書いている. (Marco Polo, I, 12. *The Book of Ser Marco Polo the Venetian Concerning the Kingdoms and Marvels of the East*, tr. and ed. by Henry Yule, 3rd ed., revised by Henri Cordier, Vol. I, London, 1926, p. 90.)

74) Plinius, *N. H.*, XXXVII, xxxix, 120; Schoff, pp. 170-71; 村川氏. 193-94頁; W. Heyd, *op. cit.*, t. II, p. 653.

75) Plinius, *N.H.*, XXXIV, xli, 145 & XXXVII, lxxviii, 204.

76) これに対して南方の海路の一番東のはては，シーン Sīn, チン Chin, シーナイ Sīnai, チナ China などの名称で呼ばれていた. *Periplus* にはティス This という地方名とティーナイ Thīnai という都市名が出てくるが (*Periplus*, 64), これらも同じ系統の語と考えられる.

77) Pomponius Mela, *De Situ Orbis*, I, 2; Plinius, *N.H.*, VI, xx, 53-54.

て用いられ，そこからかれらの珍重する絹が送られてくると考えられていたようである。マックリンドルはプトレマイオスの VI, 16 に比較的詳しく述べられている Serikē について，さまざまの人々が北は東部トゥルキスタンから南はマライ半島の Pegu にいたる間のどこかにこれをあてているが，今日一般に認められるところでは，この語は中国の北部で，旅行者や商人が陸路到達したところを意味していると述べている。またこの問題について詳細な研究を行なった山下寅次氏は，プトレマイオスの Serikē は大体パミールから東，中国の北西部におよび，北は天山，モンゴリア地方からシナ・トルキスタン，チベットを含み，ヒマラヤ山脈にまでおよんだ地域をさしているとされている[78]。セーレスの毛皮が，はたしてこの広大な地域のどのあたりからもたらされたものかは，もとより明らかではないが，ウォーミントンはこれらの毛皮の一部は絹とともにもたらされた中国の毛皮であり，一部はチベットの毛皮，とくにてんおよび白ひょうの毛皮であり，また一部はチベット北部の生皮であろうと推測している[79]。いずれにしても，それらはアジア東方の奥地から，陸路を隊商によっておそらくカーブル渓谷に運ばれ，さらにインダス川によってバルバリコンまで送られてきたものであろう。

次にバルバリコンの輸出品として記された綿布は，原文は次の生糸といっしょに *ὀθόνιον καὶ νῆμα Σιρικόν* となっており，*Σιρικόν* が両者にかかるか，それとも *νῆμα*（「糸」という意味）にだけかかるか，たしかではないが，ショッフは *νῆμα* にだけかかると考えて，*ὀθόνιον*（「亜麻」という意味）を cloth と訳してモスリンをさしているとしている。村川堅太郎氏も同様の見地から，これを「綿布」と訳されたのである[80]。

78) McCrindle, p. 300；山下寅次氏「セレス，セリカに就きての考」(『史学雑誌』17編，4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11号，18編，1, 3, 4号)（村川氏，194頁による.）

79) Warmington, p. 158.

80) Schoff, p. 172；村川氏，195頁．もし *Σιρικόν* が両者を形容しているならば，*ὀθόνιον* はセーレスの亜麻，すなわち絹布を意味することになる.

綿はインドで早くから産し，綿をあらわすとされるサンスクリットの kárpásá-í という語は，前800年ごろのものといわれる *Ásvaláyána Śurauta Sútra* に記されているという[81]。西方世界にも早くから綿や綿布は知られていたらしく，ヘロドトスはインドでは野生の木が羊毛の実を結び，この羊毛は外見も質も羊からとった毛に優り，インド人はこの木の実でつくった衣服を用いると記し，テオプラストスはインド人が衣服をつくる木の葉は，桑に似ており，かれらは畑に列をなしてこの木を植え，遠くから見るとブドウのように見えると記して，綿の栽培を示唆している。ストラボンはインドの珍しい樹木に関する記述のなかで，エラトステネスを引いて，羊毛はある種の木に咲く花で，この羊毛から見事な衣服が織られ，マケドニア人はこれを枕に用い，また鞍のしんにするといい，またかれはアリストブロスを引いて，羊毛の生じる木の花には実があり，これを取り除いて，残りを羊毛のようにすくと書いている。アルリアノスもメガステネスを引いて，インド人が Tala と呼ぶ木には羊毛のように見えるものがなると記し，またネアルコスを引いて，インド人が衣服にする亜麻は木に生じるもので，ほかの亜麻よりも色が白いと書いている[82]。以上に羊毛および亜麻と記されたものは，いずれも綿のことを述べたものと考えられる。

しかし，インドの綿布に関する古典作家の記述は，実際家である *Periplus* の作者の記事がもっともすぐれている。すでに述べたように，この書にはシュラストゥレーネー地方で「綿や

81) Watt, p. 570.

82) Herodotos, III, 106；Theophrastos, IV, iv, 8；Strabon, XV, 1, 20 & 21；Arrianos, *Indika*, VIII, vii & xvi. なおプリニウスはインドではなく，ペルシア湾内のバハライン島に比定される Tyros 島に羊毛のなる木があり，この木にはマルメロぐらいの大きさの実がなり，この実が熟するとはじけて，丸い玉があらわれ，それから衣服を織る高価な亜麻ができることを記し，この木を gossypinus というといっている．また Juba を引いて，Tyros のもっと小さい島には gossypinus が多数あり，この灌木には羊毛がなり，インドの亜麻よりすぐれた織物ができることなどを書いている．(Plinius, *N.H.*, XII, xxi, 38-xxii, 39.) これも綿について述べたものと考えられる.

それから出来るありふれた印度木綿」を豊富に産すること(41節)，オゼーネーからバリュガザへ向けて「インド産上質綿布やモロキナイや多量のありふれた綿布」が運ばれること (48節)，またタガラからもバリュガザに「沢山のありふれた綿布と種々の上質綿布とモロキナ」が運ばれること(51節) が記されている。そのほか南インドの東海岸地方では「アルガルー織と呼ばれる上質綿布」が輸出されること (59節)，タプロバネー Taprobanē，すなわちセイロン島からも上質綿布が輸出されること (61節)，東海岸のマサリアー Masaliā 地方（今日のマサーリパタムあたりと考えられる）からも上質綿布を多量に産すること (62節)，ガンジス河畔の商業地ガンゲースを通って「ガンゲース織と呼ばれる最優秀綿布」が運ばれること (63節)が，記されている。さらにすでに述べたアフリカの紅海沿岸の商業地には，アリーアケーの内地から鉄や鋼鉄とともにモナケー，サグマトゲーナイ，モロキナ，少量の上質綿布が，またソマリーランド沿岸の商業地へも，アリーアケーとバリュガザの内地からモナケー，サグマトゲーネーが送られること（6および14節）が記されている。

Periplus にはこのようにさまざまの名称で呼ばれる綿布が，インドの諸所に産することが記されているが，ショッフはこれらのうちモロキナイ molochinai とかモロキナと記されたものは，ある種のハイビスカスで染めた粗末な綿布であり，モナケー monachē は上質の綿布，サグマトゲーネー Sagmatogēnē は詰めものに用いる種類のものであると推定している。また村川堅太郎氏はラッセンに従って，モナケーを最優良綿布，サグマトゲーナイを最劣等品，モロキナを中等品とされている。また「上質綿布」には *σινδόναι* という語が用いられているが，この語はヘブライ語の Shadin，アッシリア語の Sindu からの借用語で，本来は上質の亜麻布という意味であるが，村川氏はこの語が *Periplus* では常に綿布の意味に用いられていることから，これを上質綿布と訳された。ショッフはこれを muslin，または Indian muslin と訳している[83]。またアルガルー Argalū（または Argarū）織は，南部の西海岸に近い Trichinopoly (10°49′N., 78°42′E.) の町の一部をなす Uraiyūr をギリシア語化したものと考えられ，この町や Tanjore は早くから織物工業で有名であり，またトリキノポリはチョーラ Chola 王国の首都であった。またガンゲース織はベンガル地方産の木綿織物で，この地方は早くから西北インドとならんで優秀な綿布を産した。今日でもこの地方のダッカは優秀な綿糸の産地であるという[84]。

このようにインドでは西北地方ばかりでなく，中部のデカン地方，南部のタミール地方，セイロン島，東海岸のマサリアー地方，ガンジス川流域と，各地でさまざまの綿布が生産され，それらが海外へも輸出されていたことが *Periplus* の記述からうかがうことができる。とくに西方世界への輸出は，バリュガザがその中心であったらしく，この商業地へは周辺で産するものばかりでなく，奥地のオゼーネーやタガラからも大量の綿布が送られて輸出されたのであって，ここの輸出品の中にはさまざまの木綿およびモロキノンがあげられている。そのほか糸があげられているが，これもおそらく綿糸と考えてさしつかえなかろう。バルバリコンの輸出品の中にも，さきに述べたように，綿布があげられている。しかし，南部のリミュリケー地方の商業地の輸出品の中には，綿布の記載が見られない。この地方の後背地ではトリキノポリでアルガルー織を産し，またセイロン島でも上質綿布を産したのに，輸出品の中に綿布が記載されていないのは，どうしたことであろうか。いささか疑問に思わざるをえないが，あるいは書写の際に脱落したのであろうか。

次に絹が帝国時代のローマに輸入されて，すこぶる珍重されたことは，周知の通りであり，それは同じ重量の金と価を等しくするといわれたほどに，高価なものであった[85]。そのため早

83) 村川氏，138頁；Schoff, pp. 72-73.
84) Schoff, pp. 242 & 256；村川氏，236および244頁.
85) *Scriptores Historiae Augustae*, Aurelianus, XLV.

くもティベリウス帝の治世には，絹の衣服を男子が着て身を汚してはならないという決議を，元老院が行なっている[86]。またローマと中国との間に介在し，いわゆる「絹の道」の通過するパルティアが，有利な絹貿易を独占しようとして，ローマと中国の絹貿易を妨げたことは，すでに触れた通りである[87]。しかし，帝国時代初期のローマは，パルティア人の仲介を経なくても，インドの商業地からこれを手にいれることができたことが，*Periplus* の記述から知られ，バルバリコンの輸出品の中には生糸が，またバリュガザの輸出品の中には絹布があげられている。このほか，南部のリミュリケー地方の沿海商業地の輸出品の中にも絹織物があげられている[88]。

西方世界では山まゆから絹織物をつくることが早くから行なわれていたらしく，プリニウスはアッシリアには蚕 (bombyx) がいて，かれらはくものように網を張り，それから絹という婦人のぜいたくな衣服の原料が得られると書いている[89]。しかし，中国産の絹についての正確な知識は，ローマ帝国時代に入って，中国の絹が盛んに輸入されるようになっても，なかなか伝わらなかった。このことは中国人や途中の仲介商人がその利益をまもるために，養蚕技術の秘密を保つことに努めたからだと考えられているが，ストラボンはネアルコスによって，絹はある種の樹皮からつくられると書いており，またプリニウスはセーレスについての記述の中で，「森から得られる羊毛のようなもの」で，この国が有名であると書いていることは，すでに述べた通りである。2世紀中葉ごろのポウサニアスにいたってはじめて，絹は植物性のものではなくて，ギリシア人が ser と呼ぶ虫からえられる糸で織られることが，知られるのである。しかし，この知識はその後普及しなかったらしく，4世紀のアンミアヌス・マルケルリヌスは依然としてセーレスでは森林から羊毛のようなものを産すると書いているのである[90]。このように，西方世界の人々は絹がどのようにしてつくられるかを知らなかったが，帝国時代の地中海世界には，中国産の絹が遠路はるばる送られてきたのである。そしてそれは生糸や絹布の形でばかりでなく，真綿の形のままでも送られたことが，「ティーナイと呼ばれる内陸の大きな都」から「セーレスの羊毛と糸と織物とがバリュガザへとバクトゥラを通じて陸路で運ばれ，又リミュリケーへとガンゲース河を通じて運ばれる」と *Periplus* に記されていることから[91]，うかがうことができる。

ところで，この記述は中国からインドの沿海商業地への輸送の経路についても示唆してくれる。すなわち，絹が中国からバクトゥラ Baktra

86) Tacitus, *Annales*, II, 33.
87) 本稿(2), 82頁.
88) *Periplus*, 56. 村川氏, 119頁 ; Schoff, p. 45.
89) Plinius, *N.H.*, XI, xxv, 75-xxvi, 76.

90) Strabon, XV, 1, 20 ; Plinius, *N. H.*, VI, xx, 54. ポウサニアスの絹に関する記事は，次の通りである．「セーレスが衣服をつくる糸は，樹皮からえられるのではなく，次のような異なった方法でえられる．セーレスの国にはギリシア人が ser と呼ぶ虫がいる．もっともセーレス自身は別の名前で呼んでいるが．この虫の大きさはもっとも大きな甲虫の2倍あるが，その他の点では樹下に巣をかけるくもに似ており，さらに足の数もくもと同様に8本である．セーレスは冬と夏の気候に適した家をつくって，これらの動物を養う．かれらのつくるものは繊細な糸で，その足に巻きついている．かれらはこの虫に稷を食わせて4年間飼い，5年目になると，もはやかれらが生きられないのを知っているので，緑色の蘆を与える．これはこの虫のもっとも好む食物なので，かれらは蘆をたらふく詰めこみ，満腹して破裂する．こうして死んだ虫の体内にたくさんの糸が見出されるのである。」(Pausanias, IV, xxvi, 6-8.) またアンミアヌス・マルケルリヌスは，セーレスでは森林に羊毛のようなものを産し，これに水を混ぜてすこぶる美しい糸をとり出し，それを紡いで，sericum, すなわち絹織物をつくること，さらに昔は貴族しか sericum を用いなかったが，いまでは最下層のものでさえこれを用いることを書いている．(Ammianus Marcellinus, XXIII, 6, 67.) この記事は4世紀になっても，ローマでは養蚕の技術が依然として知られていなかったのに対して，絹織物の着用は相当に普及してきたことを示唆してくれる．なお養蚕業が西方世界に伝わるのは，6世紀のユスティニアヌス帝 (527-65在位) の時，コンスタンティノープルへ蚕卵がもたらされてからのこととされているが，このことについて記しているプロコピウスは，ある僧侶たちがインドの北方に位置している Serinda という国から蚕卵をユスティニアヌス帝のもとへもたらしたことを伝えている．(Prokopius, History of the Wars, VIII, xvii, 1-8.)
91) *Periplus*, 64. 村川氏, 124-25頁. なおショッフは「セーレスの羊毛」を raw silk と訳している．(Schoff, p. 48.)

を通って陸路バリュガザへ運ばれたことが知られ，またガンジス川を通じてリミュリケーへと送られたことがうかがわれる。バクトゥラはバクトリアの首府で，今日のアフガニスタン北部のバルフ Balkhであり，漢籍に記された藍(監)市城はここに比定されている。この町は古代から東西を結ぶいわゆる「絹の道」の通過する交通の要衝で，プトレマイオスは Hierapolisでエウフラテス川を渡ったのち，メソポタミアを横断してティグリス川を渡り，イランのEkbatana (ハマダン)，Kaspian Gates，Hekatompylos (漢籍の和櫝城)，Antiochia Margiana (メルヴ，漢籍の木鹿城) を経てバクトゥラにいたり，さらにその東方の Stone Tower (*Λίθινος Πύργος*) に達する交通路を記述している。この記事は代々の商人であり，一名を Titianos ともいう，マケドニア人 Maes の情報にもとづいたテュロスの Marinos の著作に依拠したもので，この Stone Tower がセーレスから来る商人との交易の場であったようである。プトレマイオスはさらにセーレスから Stone Tower を経てバクトゥラ方面にいたる交通路のあること，またセーレスからマウルヤ朝の首府であった Palimbothra (今日のパトナ) を通ってインドへいたる交通路もあることを記している[92]。中国の商人との交易の場であったと考えられる Stone Tower の位置については，さまざまの説があり，たとえばショッフは Yarkand 川上流の Sarikor の Tashkurghan に比定し，ここはオクサス川，インダス川，およびヤルカンド川から来る通路の出あう地点で，大きな岩山の上に建てられた城砦都市であったろうと推定している。ウォーミントンやチャールズワースも Stone Tower をタシュクルガンに比定している。またブールノワはStone Towerの正確な位置はわからないが，タシュクルガンがその位置としてやはりふさわしいとしている。これに対してスタインは Karategin の渓谷が Alai 高原に接するあたりに，Stone Tower の位置を求めている。また白鳥庫吉博士は従来の諸説について詳細な検討を加え，Stone Tower を玄奘がインドからの帰途通過した大石崖に比定され，その確実な位置は明らかではないが，タシュクルガンの南東にあり，バルフから Wakhan (漢籍の護密) の渓谷を抜けてタシュクルガンの附近を通り，ヤルカンドに出る通路が，玄奘がインドからの帰途通過した道であるとともに，それは大体において西暦紀元の初頭に，ギリシアの絹商人たちに利用されていた大道に合致すると述べておられる[93]。

プトレマイオスの述べているバクトゥラや Stone Tower へは，かれも書いているように，中国からも道が通じていた。中国から西域方面へいたる通路は，長安 (今日の山西省の西安) を発して河西回廊を北西に向かい，蘭州から涼州 (武威)，甘州 (張掖)，粛州 (酒泉)，瓜州 (安西) を経て沙州(敦煌) へと走っている。敦煌を出ると間もなく砂漠の中の砦である玉門関があり，その南に陽関がある。敦煌から西域への道は3つを数えることができる。1つは敦煌から伊吾 (Hami) を通り，天山山脈の北に抜けて，Barkur, Urumchiを経，Ili盆地を通ってオクサス川方面へいたるものである。これは後世の天山北路に相当するもので，漢代には中国人が利用しなかったらしく，西域方面への通路について述べている『前漢書』の記事には見られないが，松田寿男氏は中国がはじめて西域方面と政治的交渉を

92) Ptolemaios, I, 11, 4-12 & 17, 5.

93) Schoff, p. 269; Warmington, p. 23; M.P. Charlesworth, *Trade-Routes and Commerce of the Roman Empire*, Cambridge, 1924, p. 103; L. Bournois, *The Silk Road*, tr. by Dennis Chamberlin, London, 1966, pp. 62-63; Sir Aurel Stein, *On Ancient Central-Asian Tracks*, London, 1933, pp. 292-95 (満鉄弘報課訳『中央亜細亜の古跡』，朝日新聞社，昭和16年，245-49頁.)；白鳥庫吉氏「プトレマイオスに見えたる葱嶺通過路に就いて」『蒙古学報』第2巻，昭和16年 (同氏著『西域史研究』下，岩波書店，昭和19年，1-56頁). なお玄奘は『大唐西域記』巻第十二に，大石崖が朅盤陀国の都城の東南三百余里のところにあり，そこには2つの石室があって，それぞれ1人の羅漢が中で滅尽定に入り，端然として坐しており，すでに七百余年を経過しているのに，膚骸が朽ちていないと書いている．また朅盤陀国は周囲二千余里あり，都城は大石嶺を基礎とし，徙多河を背にしていると記している．朅盤陀国はタシュクルガンに，また徙多河はヤルカンド川に比定されている．

もった当初から，この交通路はすでに漢人に知られていたと推定しておられる[94]。他の2つの交通路は，『前漢書』西域伝に北道および南道として記載されている。アジア大陸のちょうど中心に当るタリム盆地，タクラマカンの大砂漠は，北方の天山山脈および南方の崑崙山脈に挾まれているが，これら2つの山脈から流れ出す雪解け水によって，この大砂漠の南北の縁辺には，諸所にオアシスが点在し，これらのオアシスには早くから小国家が発達した。これらのオアシス国家を連ねて，北道と南道が走っているのである。北道は敦煌を出てから，天山山脈の南麓に沿ってハミ，高昌(Turfan)，焉耆(Karashahr)，亀茲（Kucha）などを通過する。南道は敦煌を出てから，崑崙山脈の北麓を，スウェン・ヘディンの探検によって有名になった「さまよえる湖」ロプ・ノールの南にある鄯善（楼蘭 Kroraina の南方）に出，次いで于闐（Khotan），莎車（Yarkand）などを通過する。両道は疏勒（Kashgar）で合し，さらに西に進んでバクトゥラに達する。もちろん時代によって，その経路にはいろいろ変動があったらしく，『前漢書』西域伝によれば，南道は莎車から葱嶺（Pamir）を越えて，大月氏，安息にいたると記され，また北道は疏勒から葱嶺を越えて，大宛（Ferghāna），康居，奄蔡に出ると記されている[95]。白鳥庫吉博士はこの南道によってパミールを越える通路は，ヤルカンドからタシュクルガンを経てバルフ（バクトゥラ）にいたる道であり，また北道によってパミールを越える通路は，カシュガルから Terek 峠あるいは Talduk 峠を通ってフェルガーナにいたる道であるとされ，後漢のころになっても，この交通路には変化がなかったものと推定しておられる[96]。

いずれにしても，バクトゥラは東西を通じる「絹の道」の通過する要衝であり，ここからはさらにインドにいたる通路が分岐していた。『史記』の大宛列伝には，大夏（従来はバクトリアに比定されたが，最近はこれを滅ぼしたトハリ Tochari に比定されている）の都を藍市城といい，そこには市があってさまざまのものが売られていることが記され，また月氏の王庭を求めてこの国へおもむいた張騫が，そこで中国の西南夷に属する卭で産する竹杖[97]と蜀(四川省)の布(絹布)を見，どうしてそれを手にいれたかと聞いたところ，この国の人が東南数千里のところにある身毒で買ってくると答えたことが記されている[98]。これによって，当時中国の四川省方面とインドとの間に往来のあったこと，またバクトゥラとインドとの間にも商人の往来のあったことが推測される。ショッフはバクトゥラから南下して，バーミアン Bamian，カーブル渓谷を通り，ハイバル峠を越え，インダス川を渡ってタキシラに出，ここからマウルヤ朝の公道によって Palibothra（パトナ）に達する交通路のあること，またこの公道から途中マトゥラーで分かれて南に向かい，オゼーネーおよびデカン方面にいたる交通路のあることを指摘している。そしてオゼーネーおよびデカン方面からバリュガザへ道が通じていたことは，すでに述べた通りである。またウォーミントンは，アフガニスタンとインドとの間にはいくつかの峠があり，

94） 松田寿男氏著『古代天山の歴史地理学的研究』，増補版，早稲田大学出版部，昭和45年，6-9頁.

95） 『前漢書』西域伝，第九十六上には，南北両道について次の通り記されている．「自=玉門・陽關-出=西域-。有=両道-。従=鄯善-傍=南山-北波レ河。西行至=沙車-為=南道-。南道西踰=葱嶺-。則出=大月氏・安息-。自=車師前王庭-。随=北山-波レ河。西行至=疏勒-為=北道-。北道西踰=葱嶺-。則出=大宛・康居・奄蔡-焉。」なお前漢のころは北道はロプ・ノールの東岸で南道とわかれ，焉耆・亀茲の間で天山山脈の南麓に出るコースをたどったようである．これは天山山脈の東部が匈奴の支配下にあったからであると考えられる．（松田寿男氏著，前掲書，27頁.）

96） 白鳥庫吉氏「塞民族考」『東洋学報』7巻3号，8巻3号，9巻3号，大正6-8年，（同氏著『西域史研究』上，昭和16年，511頁.）

97） 卭の竹杖は今日の四川省寧遠府にある卭山に産する竹でつくった杖をいう．（桑原隲蔵氏「張騫の遠征」『続史的研究』大正5年（同氏著『東西交通史論叢』弘文堂書店，昭和19年，103頁.）なお『史記集解』に「卭山名．此竹節高実レ中．可レ作レ杖」と記されている．

98） 『史記』巻一百二十三，大宛列伝に次の通り記されてある．「大夏在=大宛西南二千餘里嬀水(オクサス川)南-。……大夏民多可=百餘萬-。其都曰=藍市城-。有レ市販=賈諸物-。其東南有=身毒国-。騫曰。臣在=大夏-時。見=卭竹杖蜀布-。問曰。安得レ之。大夏国人曰。吾国人往市=之身毒-。身毒在=大夏東南可=数千里-。……」なお本稿(1), 33頁参照.

今日ではそのうちのゴマル Gomal 峠がインドへの主要な入口になっているが，古代においてはハイバル峠がもっともよく用いられたと述べるとともに，西方からインドへ達するには，3つの自然の道があり，その1つ——もっとも東よりの道——としてカーブル渓谷を通過する道をあげ，この渓谷の水源地のすぐ北のところだけで，ヒンドゥークシュ山脈がオクサス川とインダス川の流域をわけていると述べている[99]。

また白鳥庫吉博士は中国からインドへいたる交通路について，次のように述べておられる。それはさきに述べた南道の莎車から葱嶺にのぼり，山中の竭叉（タシュクルガン）に出，ここから南下してヒンドゥークシュ山脈の北麓にいたると，道は2つにわかれる，1つは西方に進んで，オクサス川上流のワカンの渓谷に下り，流れに沿って北進してバクトゥラに達する，他は南下してヒンドゥークシュ山脈を越え，難兜 (Gilgit) に出，ここからさらに南下して途中2，3の峠を越えて陀歴 (Darel, 今日の Dardistan) の渓谷に入り，この間にいわゆる懸度の険を越えて南西に下り，インダス川の流域に出，流れにしたがって下ってカーブル川の流域に出，さらに乾陀羅 (Gandhāra) 地方にいたる。白鳥博士によれば，これが中国からインドへいたる交通路であって，この道は漢代ばかりでなく，後世になってもしばしば記されていて，法顕 (337-422) 以下玄奘にいたるまで，入竺僧はいずれもこの道を通っていると述べておられる[100]。これによれば，中国からインドへおもむくにはバクトゥラを于廻することなく，タシュクルガンの西方で南下し，ヒンドゥークシュ山脈を越えてインダス川の上流に出，そこから流れに沿って下ってカーブル渓谷に出るとされているので，ここでバクトゥラからくる交通路と合したのであろう。ウォーミントンの *The Commerce between the Roman Empire and India* の巻末の地図（第2図参照）には，タシュクルガンから南下して，インダス河畔のカスパピュラでバクトゥラ方面からの通路と合する交通路が記載されているが，これが白鳥博士の述べておられる通路におおむね相当するものと思われる。おそらく中国産の絹は，バクトゥラを経由することなく，直接この通路をとってインドに運ばれたものも，相当にあったと考えてよかろう。もっとも，プトレマイオスが述べている Stone Tower が，中国方面からの商品の交易地であったとすれば，そこからバクトゥラを経てインドへ送られた絹もあったであろう。*Periplus* にはバクトゥラを通じて絹がバリュガザへ送られてくると記されているが，バクトゥラからの通路とタシュクルガンを経由する中国からの通路が，いずれもカーブル渓谷に出るということから考えれば，*Periplus* の記載は2つの通路を1つと考えて，このように記したと解することもできよう。バルバリコンから輸出された生糸も，やはりこれらの通路を運ばれてきたものが，カスパピュラでわかれて，インダス川を船で送られたのであろう。ショッフはバルバリコンではバリュガザの場合と異なって，高価な絹布ではなくて生糸が輸出されること，およびインドの沿海商業地で乳香が輸入品として記載されているのはバルバリコンだけであることに注目して，この生糸はインドよりはむしろ中国で珍重された乳香と交換するためのものであったろうといっている。すなわち，バルバリコンの生糸はアラビアに送られ，それとひきかえにアラビアの乳香が，ここを経由して中国に送られたのであろうと推定している[101]。

Periplus にはさらにガンジス川を通じて南インドのリミュリケー地方へ，絹が運ばれることが記されている。これはバクトゥラからバリュガザへ送られたものが，さらにガンジス川によってリミュリケーへ送られるのではなくて，別の道を通って中国からガンジス川方面へ送られたものと考えられる。ショッフは長安を発する西方への大道と途中蘭州でわかれ，ココノール（青海）を経，チベットのラサから Chumbi 渓

99) Schoff, p. 270 ; Warmington, p. 21.

100) 白鳥庫吉氏「仏教東漸の伝説」『仏教講話』大正15年（『西域史研究』上，651-52頁.）

101) Schoff, p. 270.

谷を通って，シッキムおよびガンジス川にいたる交通路のあることを指摘し，この通路は未開の種族によってすこしばかり用いられたが，のちにはモンゴリア——ラサ間の仏教徒の巡礼の主要な交通路となったといっている。かれはまた Arun 川によってネパールを通ってガンジス川にいたる通路，あるいはブラマプトラ川の上流に沿って Kaliās の神聖な山頂や Sultej 川の水源地にいたり，あるいは Gantok を通ってインダス川上流にいたる通路のあることを指摘している[102]。四川省からチベットを通ってインドへいたる交通路が早くからあったことは，さきに述べた張騫がバクトゥラで見た邛の竹杖と蜀の布が，身毒から買ってくるものだとの『史記』の記述から推測することができる。また同じく『史記』の西南夷列伝にも同じ記事をのせ，さらにそれに続いて，大夏より東南へ数千里のところに身毒国があり，蜀の商人が商売におもむくこと，および邛の西二千里ほどのところに身毒国があるとの張騫の報告を聞いて，漢帝は匈奴の勢力のおよばない蜀を通って身毒国へいたる道を探検させたが，結局失敗に終ったことが記されている[103]。いずれにしても，中国産の絹が四川省からチベットを通ってガンジス川方面へ送られていたものと考えられる。

ところでガンジス川方面へ送られた絹は，この川によってリミュリケーへ送られると，*Periplus* には書かれているが，その輸送経路は示されていない。しかし，この書には南部のタミール地方の東海岸の商業地について，「リミュリケーや北方から航海してくる人達が上陸する停泊地」であると記されてあり，またここからリミュリケーやガンジス川方面に航行する船舶についての記事も見られるので[104]，ガンジス川を通じてリミュリケーへ運ばれるとの *Periplus* の記述は，ガンジス川方面へ送られた中国の絹が，この川を河口まで運ばれ，次いでベンガル湾沿岸ぞいに海上をリミュリケーの商業地まで輸送されたと考えられる[105]。

以上に述べたところによって，*Periplus* の書かれたころは，西方世界はパルティア人の手を経なくても，インドの商業地から中国産の絹を手にいれることができたことが知られ，なかでもバリュガザが絹のもっとも重要な取引地であったといってさしつかえなかろう。

次にバルバリコンの輸出品の最後にあげられている黒色インディゴは，テキストには *'Ινδικὸν μέλαν*（「インドの黒色染料」という意味）とあり，ショッフはこれを単に indigo（あい）と訳している。ワットによれば，これは熱帯および亜熱帯に広く分布する Leguminosae 属の Indigofera tinctoria からえられる染料で，この植物は約300種類を数え，そのうちインドには40種類が見られ，とくに西部に多いという。またプリニウスはこれをパープルに次ぐ重要な染料としてあげており，インドの産で色は黒色であるが，これを薄めると，紫と青のすばらしい混合色を呈する，価は1ポンド20ディナリーで，薬剤としても用いられ，けいれんや発作を鎮め，またただれを乾かすのに効果があると書いている。パープルに次ぐ染料であるとすれば，西方世界で相当に需要されたものと推測される。マルコ・ポーロもインド南西岸の Colium 王国の記事の中で，インディゴについて書いており，当時もインドでは盛んにこれがつくられて，輸出されていたことがうかがわれる[106]。

次に象牙がバリュガザの輸出品の中に見られる。リミュリケー地方の商業地からも，象牙が輸出されている[107]。すでに述べたように，象

102) *Ibid.*, p. 272.
103) 『史記』巻一百十六，西南夷列伝.
104) *Periplus*, 60. 村川氏，121-22頁；Schoff, pp. 46-47.
105) 村川氏，247-48頁.
106) Watt, pp. 660 & 664 ff.; Schoff, pp. 172-73；村川氏，196-97頁；Plinius, *N.H.*, XXXV, xxvii, 46. なおマルコ・ポーロのインディゴに関する記事は次の通りである.「そこ（Colium—引用者）にはたくさんの優秀なインディゴがある．これはある種の草からえられるもので，これを集めて，〔根をとり除いたあと〕，大きな容器にいれて水をいれ，植物全体が腐るまでほうっておく．それからこの液を日にさらすと，大変暑いところなので，煮たって濃縮し，われわれの知っているようなものになる．〔それからこれを4オンスずつに分けて，われわれのところへ輸出する。〕」(Marco Polo, III, 22. *The Book of Ser Marco Polo the Venetian*, Vol. II, 1926, p. 375.)

牙はエチオピア産のものが，紅海のアフリカ沿岸の商業地から，これより劣等のものがアザニアーから，さらにソマリーランドのアウアリテースからも，西方世界に輸出されることが，*Periplus* に記されており，当時はアフリカが西方世界に対する象牙の大供給地であったことが知られる。ワットによれば，野獣の牙はアジアのものよりアフリカ産の方がはるかに良質で，象牙もアフリカ産の方がインド産のものよりきめが細かく，黄色くなりにくく，またゆがんだり割れたりしないという。村川堅太郎氏はインドの象牙は多くがインド国内で消費されたらしいと書いておられる。しかし，インドからも西方世界へ象牙が輸出されたことが，*Periplus* の記述からうかがわれるわけである[108]。

縞メノウとメノウはバリュガザの輸出品のなかに見られ，またオゼーネーからこれらが綿布とともにバリュガザに運ばれ，さらにそれより南方のパイタナからも，多量の縞メノウがこの商業地へ運ばれることが，*Periplus* に記されていることは，すでに述べた通りである。したがって，バリュガザから輸出されたものは，これらの地方から運ばれてきたものであったと考えられる。ワットによれば，これらはデカン山中，なかでも Rajpipla 州に産するという。今日バリュガザに近いカンベイ市では，これらの貴石の加工が盛んに行なわれ，ブローチ，指輪，印章，杯などがつくられている。古代においてももちろん装飾品や装身具，容器として，大いに珍重されたものであった。プリニウスはこれらの貴石がパルティアに産し，とくに最上のものはカルマニアに産すること，価は色によって異なるが，これを回転させれば，紫から白へと変化し，あるいは両方の色が混合するものもあり，紫色はきらきらと輝き，乳白色はあたかも新しい光が鉱脈を通りぬけるかのように赤くなること，メノウの容器がローマへはじめて伝わったのは，ポンペイウスの東方遠征の際であり，かれはこの石でつくった皿や杯を戦利品としてカピトールの丘のユピテル神殿に奉納したこと，メノウで皿や杯をつくる風はすぐに人々の間にひろまり，ある元コンスルは70万セステルセースを投じて求めた杯で好んで酒を飲んだこと，ネロ帝はただ1個の杯に実に100万セステルセースを支払ったこと，などを書いている[109]。縞メノウとメノウが東方世界の珍物として，ローマ人に愛好されたことが，これによってうかがわれるであろう。

次にやはりバリュガザの輸出品に見られる長胡椒は，南インド産の草本の胡椒ではなくて，Piper longum と呼ばれる別の灌木からえられるもので，この植物は東はネパール，アッサム，Khasia 山地，およびベンガルから，西はボンベイまで，南は Tranvacore，セイロン，およびマラッカまで，広範な地域にわたって分布している。1月実の青いものを採取し，日に乾して貯蔵する。乾燥した未熟の実は，インドでは古くから薬剤として用いられている。胡椒を意味するギリシア語の πέπερι，ラテン語の piperの語源であるサンスクリットの pippari は，もともとは長胡椒をさした語である。プリニウスは長胡椒は他の胡椒と採取法が異なっており，さやが開く前にもぎとったものを日に乾したのが長胡椒であるとして，黒胡椒や白胡椒と同じ植物からえられるものと考えているが，これは誤りである。同じくプリニウスによれば，その価は1ポンド15ディナリーで，黒白の両胡椒よりずっと高価であった[110]。

バリュガザの輸出品の中には，以上に述べたもののほかに，「他の商業地から運ばれた品々」があげられているが，これらがどのような品物で，どこから運ばれてきたものかは，明らかではない。しかし，*Periplus* にはリミュリケー地方の商業地のムージリス Mūziris に，アリーアケーやヘルレーネスの船が来航して，この商業地が繁栄していることが記されている。もっ

107) *Periplus*, 56.
108) Watt, p. 697；村川氏，214頁.
109) Watt, pp. 561-62；Plinius, *N.H.*, XXXVII, vii, 18-viii, 22；Schoff, pp. 193-94；村川氏，214頁.
110) Watt, p. 891；Plinius, *N. H.*, XII, xix, 26-28；Schoff, pp. 194-95；村川氏，214-15頁；山田憲太郎氏，前掲書，145-47頁.

ともショッフは，この商業地の輸入品がすべて外国産であること，また当時は南インドは北インドからまったく隔絶されていて，アーリア系の言語の影響も見られないことを論拠として，アリーアケー地方との間には貿易関係はなかったと想定し，ここに述べられているアリーアケーはアラビアの誤であろうとしている。これに対して村川堅太郎氏は，ここにいうアリーアケーが北インド第一のバリュガザ港をさすと考え，この港が南インド第一のムージリス港とインド人の船舶で交易していたことは，ありうることではなかろうかと述べておられる[111]。もし村川氏のように考えれば，バリュガザは南インドのムージリスと貿易関係があったことになり，上述の「他の商業地から来た品々」の中には，南インドの物産が含まれていたと考えることができよう。あるいはまた *Periplus* には，すでに述べたように，中部インドの西海岸に7つの地方的な商業地があげられているから，これらの商業地からその周辺や奥地の物産が土着の船舶によってバリュガザへ運ばれたということも，ありうることであろう。

以上，バルバリコンおよびバリュガザの輸出品のひとつひとつについて，いちおうの考察を加えてみたが，これらを種類または用途の上から分類して，その産地および輸出港を示せば，別表の通りである。

別表 西北インドの輸出品

種類・用途	品目	産地	輸出港
香料・薬剤・染料類	コストス	カシュミール，北インド	両商業地
	ブデルラ	西北インド，ベルチスタン等	〃
	リュキオン	ヒマラヤ山地	〃
	ナルドス	パンジャーブ，シンド，ベルチスタン，ヒマラヤ山地，シッキム，カスパピュラ，パロパニソス，カーブル等	〃
	黒色インディゴ	とくに西部インド	バルバリコン
	長胡椒	ネパール，アッサム，ベンガルからボンベイまでの地方	バリュガザ
貴石類	カルレアノス石	ホラサン，ケルマン等	バルバリコン
	サッペイロス	ボハラ	〃
	縞メノウ，メノウ	オゼーネー地方，パイタナ地方	バリュガザ
繊維製品	木綿・綿布類	西北インド，中部インド等	両商業地
	生糸	中国	バルバリコン
	絹布	〃	バリュガザ
その他	セーレスの毛皮	アジア東方の奥地	バルバリコン
	象牙	インド	バリュガザ

この表によって，西北インドの両商業地からの輸出品の大部分は，香料・薬剤・染料類，貴石類，および繊維製品の綿布・絹布などの3つに大別することができる。またその産地からすれば，インドおよびその北方のアジアの奥地の2つの地域に大別することができる。そのうちインドは西北インドばかりでなく，広く北インド，中部インド，さらに東海岸地方やヒマラヤ山地の物産までが含まれている。すなわち，デカン高原以北のインド各地の物産——コストス，ブデルラ，ナルドス，黒色インディゴ，長胡椒など，縞メノウとメノウ，相当多量の木綿・綿布類，象牙など——が，西北インドの2つの商業地から海外に輸出されていたということができる。両商業地からはそれらとならんで，イラン東部，アフガニスタン，中央アジア，さらに中国方面の物産が，はるばる隊商の手によってカーブル渓谷からハイバル峠を越えて運ばれてきて，輸出されていた。この方面からの輸出品としては，高価な香料であるナルドス，トルコ

111) *Periplus*, 54 ; Schoff, pp. 209-11 ; 村川氏，225-26頁.

玉とラピス・ラズリ，中国産の絹，セーレスの毛皮などが見られた。したがって，数量的にはどの程度のものであったかは，もとより明らかではないが，価額の上ではおそらく両商業地の輸出額の相当大きなパーセンテージを，アジアの奥地の物産が占めていたことが推測される。これらの物産はパルティアの領内を通って西方世界へ送られることもできたであろうが，当時は西北インドの沿海商業地を通して輸出されていたことが知られるのであって，このことが西北インドの沿海商業地の海外貿易の大きな特色であったということができよう。

バルバリコンおよびバリュガザへは，西方世界の商人ばかりでなく，南アラビアのムーザやカネーの商人も来航して，取引を営んでいた[112]。したがって，両商業地の以上の輸出品のなかには，南アラビア方面へ輸出されたものもあったと考えられる。ショッフはバルバリコンから輸出される生糸は，乳香とひきかえに，アラビア方面へ輸出されたと推定していることは，さきほど述べた通りである。しかし，それ以外になにをアラビア商人が求めたかは明らかではないが，おそらく綿布類はかれらも相当に輸入していたのではないかと思われる。しかし，以上にあげた輸出品は西方世界で輸入したものが大きな部分を占めていたといって，さしつかえなかろう。このことは古典作家たち，とくにプリニウスが，これらの商品の多くのものに関する知識を相当に持っていたことからも推察することができよう。もっとも *Periplus* の作者は，西方世界で求める商品に重大な関心を持っていたであろうから，それらを中心にして記述したことは想像に難くなく，両商業地の輸出品としてあげられているもの以外にも，アラビア商人の求める商品があったと考えてよかろう。このことは，VIおよびVIIで述べたように，西北インドからアフリカ沿岸やペルシア湾沿岸の商業地へ，以上にあげた商品以外に，さまざまのものが輸出されるという *Periplus* の記事からも，類推することができよう[113]。

112) *Periplus*, 21 & 27.

輸入品

バルバリコンおよびバリュガザの輸入品としては，*Periplus* に次の品々があげられている。

バルバリコン——混ぜもののない多量の衣服，少量の不純な衣服，ポリュミタ Polymita，クリュソリトン chrysoliton，サンゴ，ステュラックス styrax，乳香，ガラス器，銀器，貨幣，少量のブドウ酒[114]

バリュガザ——主としてイタリアの，またラーオディケイアーやアラビアのブドウ酒，銅，錫，鉛，サンゴ，クリュソリトン，ほんものおよび混紡の各種の衣服，種々の糸を織りまぜた1ペーキュス幅の帯，ステュラックス，メリロートン melilōton，未精製のガラス石，サンダラケー sandarakē，スティーミ stīmi (または stimmi)，この地方の貨幣と有利に交換される金・銀デーナーリウス貨幣，高価でもなく量もすこしばかりの香油[115]

両商業地には，このようにさまざまの商品が輸入されている。これらの商品のなかには，アフリカ沿岸や南アラビア沿岸の商業地の輸入品としてあげられたものと同じもの，もしくは同類のものも相当に含まれている。たとえば，衣服類はそれぞれの地方向けのものが，いままで見てきたほとんどの商業地に相当多量に送られており，それらは大部分がエジプトで生産されたと考えられることは，すでに述べた通りである。ブドウ酒は紅海のアフリカ沿岸やソマリーランドのアウアリテース，南アラビアのムーザおよびカネーに輸入されており，とくに紅海のアフリカ側の商業地の場合には，ラーオディケイアーおよびイタリア産のブドウ酒と書かれて

113) たとえば紅海のアフリカ側の商業地へは，アリーアケー地方からインドの鉄，鋼鉄，さまざまの木綿製品や綿布，皮衣，着色用のラックが輸出され，ソマリーランド沿岸の商業地へはアリーアケーおよびバリュガザの内地から，麦，米，牛酪，ゴマ油，綿布類，帯，糖密が輸出されていた．またペルシア湾の商業地へはバリュガザから大型の船舶が送られ，銅，白檀材，材木，角，ゴマノ木，黒檀が輸出されていた．(*Periplus*, 6, 14, & 36.)

114) *Periplus*, 39. 村川氏，105-106頁.

115) *Periplus*, 49. 村川氏，113-14頁.

いる。ラーオディケイアーはシリアの港であるとともに，ブドウ酒の産地としてストラボンが記述しており，また当時のイタリアはラーティフンディアによるブドウの栽培とブドウ酒の製造が盛んであったことは，前に指摘した通りである。また銅は紅海のアフリカ沿岸，南アラビアのカネー，およびペルシア湾の商業地で，錫はアウアリテースとカネーで，ガラス製品はソマリーランドのモスュルロンで，香油はムーザで，サンゴとステュラックスはカネーで輸入されている。またデーナーリウス貨幣もソマリーランドのマラオーとムーザの輸入品のなかに見られる。これらのものの多くについては，すでにそれぞれのところでいちおうの検討を加えたので，それらについては必要のあるかぎりで簡単に言及するだけにしたい。

まずバルバリコンの輸入品の冒頭には，混ぜもののない衣服が多量と不純なものが少量とあり，バリュガザでもほんものおよび混紡の各種の衣服が輸入されている。衣服・衣類はさきほども述べたように，アフリカ側の商業地でも南アラビアの商業地でも相当多量に輸入されており，これは西方世界の東方への輸出品のうちで重要な地位を占めるものであったと考えられる。西北インドの場合には，バルバリコンでは混ぜもののない衣服が多量と記されており，またバリュガザについては多量とは記されていないが，やはりある程度の量の衣服が輸入されたと考えて，さしつかえないであろう。そしてムーザやカネーの場合には上等の衣服が輸入されているが，西北インドの場合も「混ぜもののない」とか「ほんものの」という形容詞のつけられた衣服が輸入されているから，やはり上等の衣服が相当多量に輸入されたと考えてよかろう。また原産地についてはなにも書かれていないが，やはりおそらく西方世界，とくにエジプトの製品が多かったと考えてさしつかえなかろう。

以上のほか，バルバリコンの輸入品としてあげられているポリュミタは，やはり織物の一種であり，またバリュガザの輸入品のなかには，「種々の糸を織りまぜた1ペーキュス幅の帯」が記載されている。ポリュミタは「たくさんのmetos（糸）で織った織物」という意味のギリシア語で，プリニウスはたくさんの糸で織られるpolymitaという織物が，アレクサンドリアではじめられたことを書いているから[116]，これもやはりエジプト産であったと考えてよかろう。ショッフはこれをfigured linenと訳している。また種々の糸を織りまぜた1ペーキュスpēchus幅の帯も，ポリュミタのようにたくさんの色とりどりの糸を織りまぜた帯であったと思われる。ショッフはこれをメノウ鉱山で働くドラヴィダの山岳種族であるBhīls族の使用したものであったろうと推定し，現在のCoorgs族も特徴のあるガードル・スカーフを着用すると述べている[117]。

クリュソリトンはどちらの商業地にも輸入されている。chrysolitonはギリシア語で「金の石」という意味であるが，黄玉をさしていると考えられ，ショッフはこれをtopazと訳している。プリニウスはこの石が明るい黄金色の透明な石で，エチオピアに産し，またインドのものはいっそう優秀であり，そのほか黒海南岸地方やアラビアにも産するが，アラビア産のものはもっとも劣っていると書いている。もっとも良質のものを産するインドが，これをわざわざ外部から輸入するということは，理解しがたいので，ラッセンはプリニウスと*Periplus*の記事の不一致を指摘するとともに，*Periplus*の記載しているクリュソリトンは，おそらくエチオピア産のものであろうと推定している。しかし，ショッフは貴石に関するローマ人の知識がすこぶる漠然としたものであることを指摘し，西北インドへ輸入されたものは，ストラボンの書いている紅海産の黄玉であろうと推定し，村川堅太郎氏もこれに賛成しておられる。ストラボンはベルニーケーのかなたのOphiodes島にクリ

116) Plinius, *N.H.*, VIII, lxxiv, 196.

117) Schoff, pp. 167 & 190；村川氏，191頁．なおpēchusは「前膊」という意味のギリシア語で，長さの単位としても用いられ，ひじから中指の尖端までの長さが1ペーキュスで，通常約18インチ（45.72センチ）である．ラテン語のcubitusすなわちキュービット（cubit）に相当する．

ュソリトンを産すること，この石は昼間は日光よりも明るく光って見えにくいが，夜はよく見えるので，夜この石を探して目印に壺などをかぶせておき，昼間これを採取すること，エジプトの王がこの島に人を派遣して，この石の監視と採取に当らせていること，などを書いている。この「エジプトの王」はプトレマイオス朝の王をさしていると考えられ，以前はこの王朝の経営のもとに黄玉の採取が行なわれていたことを示唆してくれる[118]。

サンゴとステュラックスは両商業地で輸入されている。これらについては，すでにカネーの輸入品のところで述べたが，サンゴはヨーロッパの産物のうち，早くから東方世界に知られて珍重されたものの1つであり，両商業地ばかりでなく，リミュリケー地方の商業地の輸入品のなかにもあげられている。またステュラックス（英語の Storax，漢籍の蘇合はこれであるとされている）については，さまざまのことが伝えられていて，その実体を明らかにすることはすこぶる困難であるが，シリア産のある種の樹脂を主体とした香料のようである[119]。また乳香はバルバリコンだけに輸入されているが，この香料がソマリーランドおよび南アラビアのハドゥラマウトの特産物であることについては，すでに述べた通りであり，おそらくカネーから運ばれたものであろう。

次にガラス器と銀器はバルバリコンの輸入品のなかにあげられているが，これらは西方世界の産物と考えられる。銀製品はイタリアのカンパニアで盛んにつくられたことが知られているが，エジプトでも相当につくられたようである[120]。またガラス器は当時シリアとエジプトで盛んにつくられたが，バルバリコンに輸入されたガラス器の多くは，おそらくエジプト産で，シリア産のものは少量ではなかったかと推察される。またバリュガザの輸入品のなかには未精製のガラス石 ὕαλος ἀργή があげられており，リミュリケー地方の商業地の輸入品のなかにもこれが見られる。ショッフはバリュガザのものを flint glass，リミュリケー地方の商業地のものを crude glass と区別して訳しているが，その理由についてはなにも説明していない。これもおそらくエジプトから送られたものかも知れない。ウォーミントンはこれがインドでガラス器をつくるほか，鏡をつくるための原料として輸入されたと推定しているが，丸山次男氏は品質の悪い，安価な日用品のガラス器であったろうとされている[121]。しかし，その名称からすれば，やはりインドで加工するためのものであったと考える方が，自然のように思われる。

ところでインドでは早くからガラスの製造が行なわれていたらしく，丸山次男氏によれば，中部インドのマディヤ・プラデーシ州の中石器時代に属する Adamgarh 遺跡から早くもガラスの腕輪が発見されており，その後のインダス文明期以下の諸時代に属するガラスの遺物も発見されているという。プリニウスもガラスについての記述のなかで，インドではガラスが水晶の破片でつくられ，それゆえインドのガラスに匹敵しうるものはないと書いている[122]。このようにインドではガラス工業が早くから見られたが，J. マーシャルは紀元1世紀の終りまで，あるいはその後の数世紀間，インドにはガラス吹きの技術はもちろん，腕輪，タイル，ビーズなどの単純なものを除いては，ガラス製造の技術はなかったといっており[123]，プリニウスの上述の記述とは異なって，このような製造技術の未発達が，ガラス吹きの発明いらい急速に発達した西方世界のガラス器の需要をひきおこしたのであろう。

もっともバルバリコンへ輸入されたガラス器の一部は，インダス川をさか上って，アジアの奥地へ送られた形跡がある。この輸送路上には

118) Plinius, *N.H.*, XXXVII., xlii, 126 ; Schoff, pp. 167-68 ; 村川氏，191-92頁 ; Strabon, XVI, 4, 6.
119) 本稿(4)，53-4頁参照.
120) 本稿(4)，73頁参照.
121) Schoff, pp. 42 & 45 ; Warmington, p. 271 ; 丸山次男氏著『ガラス古代史ノート』雄山閣，昭和48年，232頁.
122) 丸山次男氏著，前掲書，第11章「インドとアフガニスタンのガラス史」，215-30頁 ; Plinius, *N.H.*, XXXVI, lxvi, 192.
123) 丸山氏著，前掲書，234頁の引用による.

タキシラとベグラム Begram の遺跡があるが，この2つの遺跡から西方世界のガラス器が発見されているのである。タキシラはサンスクリットで Takshasilā といい，パンジャーブ地方の北隅，ラーワルピンディの北西32キロの地点にある，古代インドの代表的な都市遺跡で，前500年ごろから約1,000年間にわたって繁栄した。『大唐西域記』には呾叉始羅国としてあげられ，玄奘がインドへ行く途中，烏鐸迦漢荼城から信度河を渡ってここへおもむいたこと，またこの国は周囲二千余里，都城の周囲は十余里で，酋豪たちが力を競いあい，王族は後継者が絶え，伽藍は多いけれども荒廃がはなはだしいことが記されている[124]。したがって7世紀にはすでに衰退していたことが知られる。この遺跡は1913年から1934年までマーシャルによって発掘が行なわれたが，ここの遺跡の Sirkap からは，ごく少数ではあるが西方世界から伝来したと考えられるガラス器が発見されている。すなわち，脈状文ガラスのコハク色および白い縞目のある杯2個（1世紀前半），緑色透明の脈状把手のある壺（1世紀後半），そのほか鉢型ガラス器などが出土している[125]。他方，ベグラムからは，ガラス器のすばらしい遺宝が発見された。この遺跡はカーブル川の北方約60キロ，ヒンドゥークシュ山脈の南麓にある，カニシカ王の夏の都のあったところと伝えられ，インドからバクトゥラ方面にいたる交通路上に位置している。『大唐西域記』に記された迦畢試国の都城はここであるとされているが，この書にはこの国が周囲四千余里，都城の周囲は十余里で，「宜二穀麦一。多二果木一。出二善馬・欝金香一(サフラン)。異方奇貨。多聚二此国一。」と記されている[126]。ここは1936年から42年までアッカン J. Hackin およびギルシュマン R. Girshman の指導の下に，フランス考古学調査団が発掘を行なったが，この遺跡の第2層（ギルシュマンはその終りを紀元200年ごろとしている）の「宮殿」の2室から，西方世界のガラス器や青銅器が，インドの象牙細工や中国の漆器などとともに，多量に発見された。これらのガラス器はミルフィオリの皿，エナメル彩ゴブレット，浮彫り装飾付きゴブレット，カットグラス杯，ジグザグ状ガラス紐飾り杯，ガラス・ドルフィン，金箔貼り・レリーフ文装飾杯，リュトンなど，全部で約70点を教え，由水常雄氏によれば，その多くが1世紀後半につくられたものと考えられ，作品としても非常に優れた第1級品のものが多いという。もっともこれらのガラス器の出土したベグラム第2層は，2世紀のカニシカ王の時代を中心とするものと考えられ，ウィーラーはこれらのガラス器の年代を1世紀末から3世紀にかけてのものとしているが，かれはこれらがここを通って奥地へ向かう隊商の手によってもたらされたものと推定している[127]。

124）『大唐西域記』巻第三．なお烏鐸迦漢荼城は，St. Martin によって Ohind に比定されている．ここは後世のインダス川とカーブル川の合流点の東北，Attock から25キロほど上流のところにある．(Samuel Beal, *Si-yu-ki : Buddhist Records of the Western World*, London, 1884〔reprint 1969〕, p. 114, n. 108；水谷真成氏訳『大唐西域記』（平凡社，中国古典文学体系，22，昭和46年），96頁，注1．また足立喜六氏は烏鐸迦漢荼は Udakia-Khanda で，Udakia は Attock, Khanda は国，集落の義であるとして，これを Attock に比定しておられる．（足立喜六氏著，『大唐西域記の研究』上巻，昭和17年，195頁．）なお信度河はインダス川である．

125）丸山氏著，前掲書，232-36頁．

126）『大唐西域記』巻第一．

127）Sir Mortimer Wheeler, *Rome beyond the Imperial Frontiers*, London, 1954, pp. 162-63（糸賀昌昭氏訳『大ローマ帝国の膨脹』みすず書房，昭和32年，189-92頁）；由水常雄氏著『ガラスの道——形と技術の交渉史』徳間書店，昭和48年，64-71頁．なお丸山次男氏はタキシラ出土のガラス器が1世紀のものであるのに対して，ベグラム出土のガラス器はベグラム第2期(150-250年）のものであり，タキシラへのガラス器の流入が1世紀をもって終っていることは，西方世界との海上貿易が2世紀以降急速に衰退したことを物語っていることを考えさせるとし，インドからアフガニスタンへの経路は2世紀以降影をひそめてくると推定しておられる．そして樋口隆康氏のガンダーラ美術の源流に関する研究(「西域仏教美術におけるオクサス流派」『仏教美術』71号）を参照されながら，黒海沿岸のギリシア植民都市——→カスピ海——→バクトリアのルートが，2世紀に入って，カニシカ王にはじまる第2クシャン朝以降，重要な意味を持ってきたと推定され，ベグラム出土のガラス器に虎狩りをモチーフとしたものや漁猟文や魚形ガラス器が一般的になることを，その論拠としてあげておられる．（丸山氏，前掲書，245-46頁）西方世界とインドとの海上貿易が2世紀以降急速に衰退するとの所説は，わたくしとしては支持しがたいが，丸山氏が，黒海北岸のステップ地帯からカスピ海を通って，中央アジア方面へ西方世界の文化的影響がおよんでいることを，ガラスの研究を通して↗

ベグラムを通過する道は，バクトゥラや中国へ通じるが，この方面ではバクトゥラの西方の，同様に「絹の道」の通過するメルヴにおけるソ連の発掘によって，ここのエルク・カラ内城の南壁に，パルティア以後の時期に属する大規模な建造物が見出されたが，その崩れ跡から高価なローマン・グラスが発見された[128]。ただし，このガラス器が西北インドの商業地を経由して運ばれたものか，それとも「絹の道」を運ばれたものかは，明らかではない。また中国ではすでに春秋時代に属する墓（陝県上村嶺）からガラス玉の出土が伝えられており，また洛陽に近い金村の戦国時代の古城址からは，いわゆるトンボ玉（玻璃玉）やトンボ玉を象嵌した玉玻璃嵌込背鏡，金銀錯嵌珠壺，嵌玉黄金製帯鈎などが出土している。これらのガラス玉はその技法や素材の組成分析から，中国でつくられたものようであるが，しかしその製作技術は西方から伝えられたものと一般に考えられている。ついで漢代になると，ガラス器の種類は多種多様となり，各種の装身具をはじめとして，墓鎮具，刀剣の鞘，紐懸，柄尻，矛，帯鈎などに用いられるようになった。また北九州の須玖の遺跡からは，前漢時代の多数の鏡とともにトンボ玉の破片が発見されており，朝鮮の金海貝塚からは王莽の貨泉とともにガラスの棗玉が発見されているが，これらは中国から伝来したものと考えられる。このように中国では早くからガラス器の製作が行なわれていたが，容器としてのガラス器はきわめて稀で，その確実なものはわずかに広州市の近郊で発掘された前漢末期の墓から濃紺色の広口の碗3点が発見されているにすぎない。これらはおそらく西方世界から海路によって舶載されたものと考えられる。由水常雄氏はアレクサンドリアを中心として，器腹に花文や円文，縦横の線条文などを施した深鉢がつくられて諸方に輸出されており，その多くは2～4世紀ごろの吹きガラスのものであるが，紀元前後と推定される型成形のものもあるので，広州出土のものはあるいは後者に属するものではなかろうかと推測されている。このほか F.C. ホワイトの収集したものにガラス容器の断片と思われるものがあるが，これはガラス器として独立した器物の断片か，それともなにかに象嵌したものの剝落した断片かは明らかではないと，由水氏は述べておられる[129]。以上に述べたところから，*Periplus* の書かれたころ，西方世界から西北インドの港を経由してもたらされたと考えられるガラス器は，中国では今日までのところ発見されていないといってよかろう。しかし，中国の古文献には西方世界から陸路によるガラス器の伝来を示す徴証がわずかながら見出される。原田淑人博士は，漢代に璧流離または珋などと呼ばれたものは，おそらくガラスであろうと推定

＼指摘されたことは，まことに興味深いものがある．黒海からカスピ海を通ってオクサス川方面へいたる交通路については，すでに指摘したように，ストラボンやプリニウスが書いており，ローマ帝国時代初期にはまだあまり利用されていなかったと考えられるが（本稿〔2〕，83-84頁参照），ギルシュマンはクシャン族がパルティアからメルヴを奪い，さらにネロ帝の精力的な政策によって，ローマの勢力がカスピ海東岸までおよぼうとする状勢を呈し，ローマはヒュルカニアと接触して，上述の交通路によって，パルティア領を通らないで東方の物産を確保しようとしたことを指摘している．さらにギルシュマンはクジューラ・カドフィセースがヒュルカニアと同盟して，オクサス川の航行可能なコースをすべて手にいれたとし，ついでウェーマ・カドフィセースがインド西部をすべて掌握して，ここにクシャン朝は2世紀のはじめ以降，東西間を結ぶ3本の重要な交通路，すなわち上述の黒海とカスピ海を連ねる北方交通路，パルティア領を通る「絹の道」，およびインドと紅海を結ぶ海路のすべてをコントロールできる立場に立ったといっている．（ギルシュマン著，岡崎敬氏他訳『イランの古代文化』〔R. Ghirshman, *Iran: From the Earliest Times to the Islamic Conquest*, Penguin Books, 1954〕，平凡社，昭和45年，259-62頁.）またボンガルド・レヴィンは中央アジア方面のソ連の考古学的調査・研究の成果にもとづいて，クシャン朝支配下の中央アジアでは，絹の道やインド方面からの通路とならんで，黒海北岸の古代都市からオクサス川下流のホレズム地方にいたる交通路のあったことを推定している．（G. M. Bongard-Levin, Studies in Ancient India and Central Asia, Soviet Indology Series, Calcutta, 1971, pp.198-99.）以上のような状勢は，2世紀以降，北方交通路によって東西間の接触が密接になっていったことを示唆してくれる．

128）V. マッソン著，加藤九祚氏訳『埋もれたシルクロード』（岩波新書），1970年，162頁.

129）由水常雄氏著，前掲書，26-42頁；梅原末治氏「河南安陽と金村の古墓」（『史学雑誌』47巻9号）（同氏著『支那考古学論考』，弘文堂書房，昭和13年，373-91頁）；同氏「支那漢代の玻璃」，『徳雲』4巻1号（同氏著，前掲書，402頁.）

され，また時代は下るが西晋の時代，すなわち3世紀のころの中国の詩人が，瑠璃鍾・瑠璃椀・瑠璃巵などを詠じた詩があり，この詩の序からガラスを非常に珍重し，宝物視していることがうかがわれることを指摘され，また晋の潘尼の『瑠璃碗賦』には，西方の砂漠をわたり，葱嶺を越えて瑠璃の碗が入ってきたことが詠まれていることを指摘されて，「その頃西方との交通が盛んであったところから考へれば，羅馬の方面からグラスが支那に輸入されたことは推想されるのであるし，又製法も伝はったことは事実であらう」と述べられ，しかし，精巧なガラス器は漢代の中国ではつくられなかったろうと推定しておられる[130]。以上によって，バルバリコンに輸入されたガラス器が，タキシラやベグラムに運ばれ，さらに遠く中央アジアから中国方面へ隊商の手によって運ばれたことが，想定されるであろう。

次に貨幣は両商業地の輸入品に見られ，とくにバリュガザの場合は「此の地方の貨幣と有利に交換される金，銀デーナーリウス貨幣」と記されている。またリミュリケー地方の商業地の場合は，輸入品の冒頭に「極めて多量の貨幣」と書かれている。ローマの貨幣が東方世界へ大量に流入していったことは，その他の文献からもうかがわれる。たとえば，ローマの金が宝石を求めて異国や敵国に流れてゆくのを，ティベリウス帝が慨歎していることを，タキトゥスが伝えているし，またプリニウスはいかなる年でもインドがローマ帝国から吸収する富は，5,000万セステルセースを下ることはなく，これに対してその100倍の値で売れる商品をインドは送り返すと書いている[131]。ローマの貨幣がこのように多量にインドにもたらされたということは，ソマリーランドや南アラビアの場合と同様に，西方世界のインド貿易が多分に輸入超過であったことを物語ってくれるものと考えられ，今日インドでは帝国時代のローマの貨幣が多数発見されている。しかし，インドでローマの貨幣が発見されるのは，南部のタミール地方に集中しており，しかもアウグストゥス帝およびティベリウス帝の貨幣がその大部分を占めている。北インド方面では，わずかにタキシラでティベリウス帝のばらばらになった貨幣が発見されているにすぎない[132]。しかし，このことは北インドにローマの貨幣がもたらされなかったからでないことは，両商業地の輸入品についての *Periplus* の記述から見て明らかである。

それでは南インドで多量にローマの貨幣が発見されているのに，北インドではなぜ発見されないのであろうか。このことは単なる偶然によるものとは思われない。南インドでローマの貨幣が多量に発見されるのは，当時貨幣経済が発達していなかったタミール地方では，輸入されたローマの金・銀貨が，貨幣としてではなく，単なる金銀塊として商品の交換に利用され，それらが多数貯えられたものが，今日遺宝の形で発見されるためであると，一般に考えられており，事実数十，数百枚のローマ貨幣がまとまって発掘されることが，すくなくない。北インドでも貨幣経済が発達していなかったことは，*Periplus* にバリュガザ地方で前2世紀のバクトリアの王アポルロドトス Apollodotos やメナンドロス Menandoros の古いドゥラクメー貨幣が流通していると記されていることからも推測することができる[133]。しかし，北インドに侵入してこの地方を支配したクシャン朝のウェーマ・カドフィセース Wema Kadphisēs（漢籍の閻膏珍）は，それまでの銀貨に代って新たに金貨を発行し，しかもそれにローマ帝国の貨幣の基準単位（stāter＝aureus＝denarius＝142 grains or 8.035 grammes）を採用して，2 aurei の重さの金貨を鋳造したのである[134]。ウェーマ・カ

130）原田淑人氏「古代玻璃器」（『古代外邦陶器図譜』，大正15年）（同氏著『東亜古文化研究』，座右宝刊行会，昭和15年，413-19頁.）

131）Tacitus, *Annales*, Ⅲ, 53；Plinius, *N. H.*, VI, xxvi, 101. プリニウスはまた別のところで，インド，中国，およびアラビアが，毎年ローマから1億セステルセースを奪いとると書いている.（*Ibid.*, XII, xli, 84.）

132）Wheeler, *op. cit.*, pp. 136-37（糸賀氏訳，162頁.）

133）*Periplus*, 47. 村川氏，112頁；Schoff, pp. 41-42.

134）中村氏，173頁；シルヴァン・レヴィ著，山口益・佐々木教悟氏訳『インド文化史—上古よりクシャーナ時代まで—』（L' Inde civilisatrice : apperçu historique,↗

ドフィセースの統治年代については，スミスは紀元77年あるいは78年に王位につき，110年まで支配したとしており，また中村元氏は187年の年号のある Khalatse 刻文がかれに言及しているが，この年号を古シャカ暦のものとすれば，かれが紀元37年ごろ王位にあったことになるが，それでは早すぎるようだと述べておられる[135]。このようにかれの統治年代は明確ではないが，西方世界の海上からのインド貿易が盛んに行なわれていた1世紀の後半もしくは末ごろの人であったことはほぼ疑いがなく，かれの金貨の発行は西方世界との貿易を発展させるために行なわれたものと考えられる。ウィーラーはローマの標準によるクシャン朝の金貨の発行について，この王朝が吸収しうるすべてのローマの金貨を吸収し，調整し，再鋳した，そして自国の領内に入ってきたすべてのローマの金貨を毀損させ，これらが通貨として土着の貨幣と競争する可能性をなくし，金塊や装飾品としてだけ使用できるようにしたと述べている[136]。このようにクシャン朝は西方商人のもたらすローマのデーナーリウス金貨を吸収して，代りにこれとパーの自国の金貨を発行したのであって，その際デーナーリウス金貨を地金として利用したものと考えられる。南インドに多量にローマの金貨が残っているのに，北インドでこれらが発見されない理由は，こうした事情に求められるというのが，今日行なわれている一般的な見解のようである。もっとも，西北インドの外国貿易は，輸出品のところで述べたように，土産の商品ばかりでなく，中央アジアや中国方面から送られてくる商品も相当多量に扱われたから，両商業地へ運ばれたローマ帝国の貨幣の一部は，当然それらの地方へ見返りとして送られたであろう。現にオクサス川に沿うテルメズ（バクトゥラの北々東）周辺のハイラバード・テペと呼ばれる四角な屋敷の廃墟のクシャン時代の文化層からは，ネロ帝の見事な貨幣が発見されている。またソグディアナの北辺，今日のウラ・チュベ市附近からは，約300個のローマの銀貨が発見されている。もっともこの方はそれらのうちわずか20個ほどの2世紀に属するデーナーリウス銀貨だけが，学者の手に入っただけであるという。さらに中国の陝西省霊石県では，ティベリウス帝からアウレリアヌス帝（270-75在位）にいたるまでのローマの貨幣16個が発見されている[137]。これらの貨幣のうち，すくなくとも一部のものは，西北インドの沿海商業地から陸路中央アジアや中国へ送られたものと考えてよかろう。

ウィーラーは上述の記述に続いて，ローマ帝国の銀貨についても言及しているが，かれは紀元1～2世紀のインドでは，輸入されたデーナーリウス銀貨に匹敵しうる銀貨は存在しておらず，クシャン朝はほとんど銀貨を発行しなかったから，西方世界から流入する銀貨については，別段の問題にはならなかったといっている[138]。すなわち，デーナーリウス銀貨に対しては，クシャン朝は金貨に対するような措置をとらなかったと，ウィーラーは考えている。クシャン朝ではウェーマが少数の銀貨を発行した以外，銀貨の鋳造は行なわれなかったようであるが，中村元氏は当時北インドで銀が極度に不足していたことがその原因ではなかろうかと推測され，インド・パルティアン系の王であった前1世紀末ごろの Azes 2世以後，銀貨の品質が悪化したことを指摘しておられる[139]。しかし，ローマのデーナーリウス銀貨が，インドに相当多量に入ってきたことは，南インドにおけるそれらの発見から明らかであり，またバリュガザの輸入

↘1938)，平楽寺書店，1958年，240-41頁.

135) Smith, pp. 269-71；中村氏，169-70頁.

136) Wheeler, *op. cit.*, p. 142（糸賀氏訳，166-67頁.）

137) V.マッソン著，前掲書，67および96頁；Bongard-Levin, *op.cit.*, p. 184; G.W. Bushell,"Ancient Roman Coins from Shansi," *Journal of the Peking Oriental Society*, Vol. I, 1885（村川氏，212頁による.）

138) Wheeler, *op.cit.*, pp. 142-43.（糸賀氏訳，167頁.）

139) 中村氏，171頁．なお佐藤圭四郎氏はこのように銀貨の品質が低下したのは，この王国が鉛貨などの卑金属の貨幣を多く用いたアンドラ王朝と広く貿易を営んだ結果，卑金属を混ぜて貨幣の品質を低下させる技法を学んだからであろうとされ，また品質低下の原因は，それまで西北インドへ銀を供給していたパルティア治下の西アジアから，銀の流入がとだえたことに求められようと推定しておられる.（同氏著『古代インド』〔河出書房『世界の歴史』6〕，昭和43年，271-72頁.）

品のなかにデーナーリウス銀貨が記載されていることからしても，北インドにローマの銀貨が相当多量にもたらされたことが推測される。したがって，これらのデーナーリウス銀貨が金貨と同様に北インドで発見されないのは，やはり溶かされてしまったからではなかろうか。クシャン朝がほとんど銀貨を発行しなかったとすれば，それらのうちクシャン朝の銀貨に再鋳されたものは，たとえあったとしても，ごくわずかだったであろう。しかし，サカ系の支配者も銀貨は発行しているし，またこの地方で銀が不足していたとすれば，銀製品の地金として利用されたことも考えられるであろう。

ウォーミントンはローマの貨幣のインドへの大量の輸出は，貨幣経済が未発達で卑金属貨幣しかなかったインドに，通商上必要な通貨が不足していたことがその一因であり，またバリュガザに送られたローマの貨幣の一部は，サカ族の銀貨およびアンドラ朝の鉛貨と交換されたと推定し，このことがバリュガザでローマの金・銀貨が有利に交換されるという *Periplus* の記事の意味であるといっている[140]。このことは，アウグストゥス帝およびティベリウス帝の良質の貨幣が多くインドへ送られたということからも，ある程度類推することができよう。両帝の貨幣が多くもたらされたということは，両帝の時にインド貿易がもっとも盛んであったということを意味するわけではない。むしろインド側で良質の貨幣を好んで求めたために，その後のカリグラ，クラウディウス，ネロ帝のころになっても，西方世界の商人が依然として以前の良質の貨幣をインドへもっていったからであると考えられる。このように考えれば，インドの商業地のデーナーリウス金・銀貨の大量の輸入は，西方世界側の入超を補うためばかりではなく，インド側の貨幣経済の未発達にもその一因があったということになるであろう。

次にブドウ酒はバルバリコンでは少量が，またバリュガザでは「主としてイタリアの，またラーオディケイアーのやアラビアの」が輸入されている。イタリアとシリアのラーオディケイアーのブドウ酒についてはすでに述べたが，アラビアでもブドウ酒を産したことは，*Periplus* にムーザ地方でブドウ酒がかなりできることが記されていることから，知ることができる。またかつて南アラビアのカタバーン王国の領域にあったと考えられる Hajar Bin Ḥumeid の遺跡からは，土器を焼く際粘土の中に混入したブドウ（Vitis vinifera L.）の種子の痕跡が，その最上層から出土した土器の破片から発見されている[141]。いずれにしても，アラビアのブドウ酒は，ムーザまたはカネーの商人がもたらしたものであろう。

次に銅，錫，および鉛がバリュガザの輸入品のなかに見られる。古代のヨーロッパでは銅はスペインやキプロス島が，また錫はスペイン，ガリチア，イギリスのコーンウォールなどが，その産地として知られていた[142]。また鉛については，プリニウスはスペイン，ガルリアの諸州，とくにブリタンニア島に豊富に産し，鉛管や薄板をつくるのに用い，また薬用にもされることを記し，さらにインドでは銅も鉛も産せず，貴石や真珠と交換にこれを手にいれると書いている。ショッフはバリュガザへ輸入されたものは，大部分がサカ族の貨幣鋳造に用いられたのであろうと推定しているが，鉛の貨幣はサカ族ではなく，アンドラ王朝のものである。この王朝の下では，鉛または特殊な銅の合金からなる貨幣がつくられている[143]。

バリュガザの輸入品に見られるメリロートンは，Trifolium melilotus というクローバーの一種と考えられ，ショッフはこれを sweet clover と訳している。プリニウスによれば，これ

140） Warmington, pp. 277-78.

141） *Periplus*, 24. 村川氏, 94頁；Schoff, p.31; Thomas R. Soderstrom, "Impressions of Cereals and Other Plants in the Pottery of Hajar Bin Ḥumeid," (*Hajar Bin Humeid : Investigations at a Pre-Islamic Site in South Arabia*. ed. by Gus W. Van Beek, Baltimore, 1969, p. 401.)

142） 本稿(3),『流通経済論集』Vol. 7, No. 3, 52および73頁.

143） Plinius, *N.H.*, XXXIV, xlviii, 163-l, 166; Schoff, p. 190；Wheeler, *op.cit.*, p. 140（糸賀氏訳，164頁）；中村氏，221頁.

は花冠をつくるのに用いられる植物で，香りも花もサフランに似ており，イタリアのカンパニア，ギリシアの Sunium，カルキディケー，クレタ島のものが知られており，また薬剤としては卵黄または亜麻仁を混ぜたものが眼病に効き，バラ油とともに用いれば，顎や頭部の痛みをやわらげ，そのほか胃痛をやわらげるなど，さまざまに用いられる。さらにプリニウスは冠に関する詳細な記述のなかで，ローマ人の奢侈の風が進んだために，冠がインドやインドのかなたからもたらされるナルドスの葉や香油にひたした色とりどりの絹布でつくられるようになったといっている。そこでショッフはメリロートンがバリュガザへ輸入されるのは，あるいはインドで花冠をつくってローマへ再輸出するためのものではなかったかと推測しているが，村川堅太郎氏はこれには疑問を呈しておられる[144]。むしろ薬剤として輸入したと考える方が自然のように思われる。

サンダラケーは砒石の紅色琉化物で，ショッフはこれを realgar（雞冠石）と訳している。かれはこれが主としてペルシアおよびカルマニアに産し，ペルシア湾の諸港からインドへ送られたものと推定している。かれはさらに今日ではこれが雄黄とともにビルマや中国に大量に産するので，*Periplus* のころにもそれが利用された可能性があると推測している。村川堅太郎氏は『通典』の波斯国の条に「銅・錫・鑛鉄・朱砂・水銀」を産するとあるのを引いて，この朱砂がサンダラケーではなかろうかとされている。プリニウスはサンダラケーは金鉱や銀鉱のなかに見出され，色が赤く，硫黄の有毒な香りを発し，純粋で砕けやすいものほど良質であること，それは洗浄や止血などの作用があり，点眼水の成分として用いられ，蜂蜜とともに用いれば，咽喉部を清め，声を美しくし，テレビン油に混ぜて食物にいれて食べれば，喘息に効くことなどを記している[145]。

次のスティーミは柱状結晶をなした硫化物の鉱石である輝安鉱（stibnite）で，ショッフはこれを antimony と訳している。この鉱石は東アラビアおよびカルマニアに産し，インドとエジプトで軟膏や眼薬をつくるのに用いられたと，ショッフは述べている。プリニウスはこれが銀鉱のなかに見出されること，乳香とともに粉末にしてこれに樹脂を混ぜたものは，眼の充血や潰瘍に効き，また脳出血にも効果があり，獣脂および密陀僧（一酸化鉛）と混ぜると，切傷，咬傷，火傷に効果があること，そのほかさまざまのことを記している[146]。その産地が東アラビアやカルマニアであるとすれば，これもペルシア湾方面から運ばれてきたものと思われる。

最後に「高価でもなく量も少しばかりの香油」がバリュガザの輸入品としてあげられている。香油はさまざまの植物を混ぜあわせてつくったもので，プリニウスはこれについてすこぶる詳細な記事を残しており，古代のローマには多種多様の香油のあったことがうかがわれる。かれは香油の記事のなかで，「あらゆるぜい沢のうちで，もっとも無用のものが香油である。なぜなら，真珠や宝石は着用者の後継者に伝わるし，衣服はしばらくは持続するが，香油はすぐにその香りを失ってしまい，使用するとたんに消え失せてしまうからだ」と述べ，「しかもその価は1ポンド400ディナリー以上もするのだ」と書いている[147]。もっともバリュガザの輸入品は，あまり高価なものではなく，量もわずかと記されている。これは西方世界から送られたものと考えて，さしつかえなかろう。

以上，西北インドのバルバリコンおよびバリュガザの輸入品について検討してみた。2つの商業地にはすこぶるヴァライティに富んだ，さまざまのものが輸入されているが，そのうち南アラビアのハドゥラマウト産と考えられる乳香，アラビア産のブドウ酒，ペルシアおよびカルマニア産と考えられるサンダラケー，ならび

144) Plinius, *N.H.*, XXI, xxix, 53 ; lxxxvii, 151 ; viii, 11 ; XV, vii, 30 ; Schoff, pp. 190-91 ; 村川氏, 210-11頁.

145) Schoff, pp. 191-92 ; 村川氏, 211頁 ; Plinius, *N.H.*, XXXIV, lv, 177.

146) Schoff, p. 192 ; 村川氏, 211頁 ; Plinius, *N. H.*, XXXIII, xxxiii, 101-xxxiv, 104.

147) Plinius, *N.H.*, XIII, iv, 20.

に東アラビアおよびカルマニア産と考えられるスティーミを除けば，ほかはいずれも西方世界から送られたものと考えられる。そのなかにはサンゴや銅，錫，鉛のように，明らかにヨーロッパ産と考えられるものや，ステュラックスのようなシリア方面で産したと思われるもの，イタリアやシリアのラーオディケイアー産のブドウ酒があり，またガラス器の一部は多分シリア産であったろうが，それらを除いた多くのものはエジプトの産物であったと考えられる。なかでも衣服類の大部分はそうであったと考えてよかろう。

しかし，これらさまざまのものを持っていっても，両商業地からの輸出の方がおそらくはるかに多額であったために，西方側の大きな輸入超過をまぬかれることができなかったと考えられる。この現象はソマリーランド沿岸および南アラビア沿岸でも見られたのであるが，インドではとくに著しく，そのためデーナーリウス金・銀貨，とくにアウグストゥス帝およびティベリウス帝の良質の貨幣を大量に持ってゆかなければならなかった。これらの良質の貨幣は，インド側の貨幣経済の未発達の故に，現地での商品の買付，交換にも好都合であったと考えられ，そのことがこれらの貨幣のインドへの流出をいっそう顕著にしたものと思われる。

ところですでに輸出品のところで述べたように，西北インドの２つの商業地からは，インドの物産のほかに，中央アジアや中国の物産が盛んに輸出され，西方世界の商人はこれらを大量に買い求めたのであった。このような事情から考えれば，両商業地へ運ばれた西方世界の商品のうちの相当の部分が，その見返りとして同じ経路を逆にアジアの奥地へ送られたことは，当然推測できるであろう。たとえば，サンゴやステュラックス（蘇合）は，『後漢書』西域伝，大秦国の条にこの国の物産としてあげられており，中国にも早くから伝わっていたものと考えられる。またガラス器は，すでに述べたように，中央アジア方面にいたる交通の要衝であるタキシラ，とくにベグラムで多数発見されており，それより奥地ではメルヴで発見されているが，おそらく中央アジアや中国方面へも送られたものと思われる。貨幣もティベリウス帝のものがタキシラで発見されているほか，バクトゥラの北々東のテルメズやソグディアナのウラ・チュベ市附近，さらに中国の陝西省でも発見されている。そのほか南アラビアから送られてきた乳香も，おそらく中国方面へ送られたのであろう。このように西北インドの沿海商業地に輸入された商品のうちのかなりの部分が，インドを通過してアジアの奥地へ送られていったことが考えられる。

しかし，西北インドの沿海商業地を経由してアジアの奥地へ送られたのは，これらの品々だけではなかったようである。タキシラではすでに述べた少数のガラス器のほかに，西方世界から伝わったと思われる１個の酒器，１～２個の珠玉が出土しており，そのほか西方世界からもたらされたと思われるさまざまの工芸品や信仰の対象としての彫像さえも発見されている。たとえば，右の人さし指を口にあてておそらく沈黙の身振りを示したと思われる，子供の神 Harpokrates のすばらしい青銅製の小彫像が見出されている。それは頭に上・下両エジプトの王冠を着けており，この神の祭祀の中心がアレクサンドリアであったから，多分そこから紀元１世紀ごろにもたらされたものと考えられる。これに類似の彫像はベグラムでも発見されている。またディオニュソスまたはシレヌスを現わした，いくぶん粗野な銀製の打出し細工，鼠の尾のように隆起した偶蹄の柄のついたグレコ・ローマン型の銀製の匙，先端が雄羊の頭部になっている筒状の柄のついた２～３個の青銅製鍋なども発見され，それらはやはり紀元１世紀のもので，西方世界からもたらされたものと推定されている。またタキシラ周辺の僧院の遺跡からも，西方からもたらされたと考えられる浮彫および丸彫の，石製，粘土製，なかでもストゥッコの彫像が多数発見されている。ウィーラーはこのような西方世界の通常の商品とは異なった——とかれは考えている——ものは，取引というより

は，西方の文物の偶然の獲得を思わせ，したがってこれらの遺物が多数出土しているタキシラは，西方世界の商品の定期的な取引地ではなくて，むしろここを通過する隊商から購入または課税によって取得したものであろうと推定している[148]。*Periplus* には方々の沿海商業地に関する記述のなかで，輸出入品のほかに，そこの支配者に対して工芸品，そのほかのものを贈ることが記されている。バルバリコンに関しては，そのような記述は見られないが，バリュガザに関しては，王に対する贈り物として，「高価な銀器や音楽の心得のある少年や後宮の為の美しい処女や優秀な葡萄酒や混ぜ物のない高価な衣服やすぐれた香油」があげられている[149]。当時の外国人商人は，かれらが取引を行なう商業地を支配する支配者に対して，このようにさまざまの高価なものを献上して，取引が円滑に行なわれるようにはかったものと考えられるが，タキシラで発見された上述の遺物のなかには，そのような贈り物もあったのではなかろうかと思われる。

ウィーラーはさらにベグラムの遺宝に関して，さきに述べた西方世界のガラス器のほかに，中国の漆器，インドの骨製や象牙製の箱や飾り板，西方世界の一群の青銅製の鉢，ミネルヴァおよびマルス神の形をした一群のさお秤の分銅などが発見されたことを指摘し，これらのものからなるベグラムの遺宝は，150年間にわたる堆積物であるとし，これらは東洋と西洋との奢侈貿易のために，ここの公道を通過する隊商から，関税として徴収した品物であろうと推定している[150]。ウィーラーの推定はともかくとして，これらの遺物は，*Periplus* に記載された輸出入品のほかに，さまざまのものが西方世界から送られ，それらの中には美術工芸品や信仰の対象としての彫像までが含まれていたことを物語ってくれる。さらにソ連の発掘によって，ソ連領の中央アジア方面にも，西方世界からさまざまのものが送られたことが，明らかとなった。たとえば，バクトゥラ北々東のテルメズでは，浮彫風の像で装飾された彩釉陶器が発見されており，それには笑っているディオニュソス神の頭部とこの神のために踊っている男女や竪琴ひきの女性が現わされている。またソグディアナ地方では，サマルカンドで多数のテラコッタ製の像が発見されたが，その中にはゴルゴンの頭部，コリント式の兜を着けた戦士の頭部，ディオニュソス風の人物像などがあり，このほかサマルカンドではエジプトの垂飾や護符，ローマの燈火用具，恥かしそうに肩を抱く3人の美女を現わした粘土のモデルなどが発見されている。またホレズム地方でもエジプトのベス神像が発見されている[151]。いずれにしても，これらの出土品のうちの多くは，西方世界でつくられたものと考えられ，そのなかには西北インドの沿海商業地を経由して西方世界から送られたものが，相当に含まれていると考えてさしつかえなかろう。さらに以上に述べたところから，東トルキスタンや中国本土方面へも，西方世界のさまざまのものが，やはり西北インドの沿海商業地を経由して送られたことが，推測されるであろう。

これまで西北インドを中心として，ローマ帝国時代初期の西方世界と東方世界との海上貿易について考察を加えてみた。インドは物産豊かな国として，古代の西方世界の商人にとっては，大きな魅力のある国であった。そればかりでなく，西北インドの沿海商業地には，絹，その他のアジアの奥地の商品も運びこまれてきた。西方世界の商人に季節風を利用してインド洋を横断するという，古代の船乗にとってはまことに大胆きわまる大航海を敢行させたのは，このようなインドおよびアジアの奥地の豊かな商品の存在であったのであり，西北インドの沿海商業地の貿易では，インド自体の物産の取引とならんで，イラン東部，アフガニスタン，中央アジア，および中国方面の物産の取引が相当大きな

148) Wheeler, *op.cit.*, pp. 158-60.（糸賀氏訳，185-87頁.）
149) *Periplus*, 49. 村川氏，114頁.
150) Wheeler, *op. cit.*, pp. 163-64.（糸賀氏訳，191-92頁.）
151) マッソン著，前掲書，71-72, 90, 96, および189頁.

ウェイトを占めていたといってよかろう。

インド亜大陸は北方を高峻なヒマラヤ山脈およびヒンドゥークシュ山脈などによってさえぎられ，他のアジアの諸地域から切りはなされているように見える。しかし実際は，この高峻な山岳地帯はなんカ所かの峠によって，アジアの奥地との間の通行が可能であり，*Periplus* の書かれたころは，これらの峠の1つであるハイバル峠を通って，アジアの奥地の物産が西北インドへ運ばれてきたのである。もとよりその交通路は，恐るべき砂漠と険しい山地を通っており，その往来がきわめて困難であったことは，実際にこの道を通った入竺僧らの記述などから，これをうかがうことができる[152]。隊商たちにとっても，もちろんその困難にかわりはなかったであろう。しかし，かれらはその困難を冒して，アジアの奥地から絹，その他の珍奇な物産を，西北インドの沿海商業地まで輸送したのである。この交通路はこのように東西間の貿易に大きな役割を演じたばかりでなく，両者間の思想や文化の交流にも大きな貢献をしている。たとえば，仏教が中央アジアおよび中国方面へ伝来したのも，またなん人もの仏僧があるいは弘法のため，あるいは求法取経のため，インドと中国との間を往来したのも，このような交通路が開けていたからである。もとよりアジアの奥地とインドとの間の商品の流れは，*Periplus* の書かれた時代にはじまったわけではなく，それよりはるか以前から行なわれていたものであろう。おそらくそのような古くからの商品の流れが，この交通路が開かれるのに大きな貢献をしているものと推察される。

ところで，*Periplus* の書かれた紀元1世紀の後半の時期は，この交通路を通過する商品の流れはかなり活発なものがあったことが，以上に述べたところから明らかである。当時はすでにクシャン朝第一代の王となったクジューラ・カドフィセース（カドフィセース1世）（漢籍の丘就卻）がパルティアに侵入し，さらにカーブルからガンダーラ地方まで征服して，中央アジアに覇権を確立していたと考えられる。その年代は明確ではないが，中村元氏は紀元25年よりすこしのちのことであったろうと推定されており，またタキシラ地方の発掘の結果，かれがこの地方をも占領したことが明らかとなったが，かれ以前にこの地方を支配していたインド・パルティアン系の王グドゥヴハラ Guduvhara（ゴンドファルネース）は，紀元44年ごろはまだタキシラ地方を支配していたことが知られるので，クジューラのタキシラ占領はそれよりのちのことであろうと述べておられる。またスミスはクジューラのうちたてた帝国は，ペルシア国境からインダス川，あるいは多分 Jehlam 川にまでおよび，ソグディアナや今日のアフガニスタンの全域を含んでいたものと想定し，かれがカーブル地方を征服したのは紀元50年ごろのことであったろうとしている[153]。かれに次いでその子ウェーマ・カドフィセース（カドフィセース2世）が北インドに侵入して，これを征服した。その年代についてはすでに述べたが，スミスはウェーマがパンジャーブ地方やガンジス川平野を多分ベナレスにいたるまで征服し，北インドの征服を完成したと推定している。また中村元氏は『後漢書』西域伝，大月氏国の条に記されたかれのインド（天竺）征服の記事は，サカ族の支配して

152） たとえば『法顕伝』には敦煌から鄯善にいたる17日間の砂漠の通行について，「砂河中多有=悪鬼・熱風=。遇則皆死。無=一全者=。上無=飛鳥=下無=走獣=。遍望極レ目欲レ求=度処=。則莫レ知レ所レ擬。唯以=死人朽骨=為=標識=耳。」と記されており，またパミール越えについて「葱嶺冬夏有レ雪。又有=毒竜=。若失=其意=。則吐=毒風雨雪=。飛=沙礫石=。遇=此難=者。萬無=一全=。彼土人人即名為=雪山人=也。」と書かれている．足立喜六氏は上述の「毒竜」について「パミール高原には特有の烈風あり。時々雨雪・砂石を飛ばし暴威を極む。之を毒竜の行為となすなり」と注記している．（同氏著『法顕伝』三省堂，昭和11年，31-32頁．）また玄奘も『大唐西域記』巻第一で，ヒンドゥークシュ山脈（大雪山）を越えた時のことを，「東南入=大雪山=。山谷高深。峰巌危険。風雪相継。盛夏合凍。積雪弥レ谷。渓径難レ渉。山神鬼魅暴縦=妖祟=。群盗横行。殺害為レ務。」と書き，また巻第十二で瞿薩旦那国（ホータン）の東方にひろがる大砂漠について「従レ此東行。入=大流沙=。沙則流漫。聚散随レ風。人行無レ迹。遂多迷レ路。四遠茫茫。莫レ知レ所レ指。是以往来。聚=遺骸=以記レ之。乏=水草=多=熱風=。風起則人畜悟迷。因以成レ病。時聞=歌嘯=。或聞=號哭=。視聴之間。怳然不レ知レ所レ至。由レ此屢有=喪亡=。蓋鬼魅之所レ致也。」と書いている．

153） 中村氏，166-67頁；Smith, pp. 266-67.

いたインダス川流域のことであろうと推定しておられるが，同時にかれの勢威が北インドの相当広範な地域にまでおよんだことは疑うべくもないとされ，かれの時代にクシャン帝国が統一国家として完成されたとしておられる[154]。*Periplus* の書かれたのが，クジューラの治世であったか，それともウェーマの治世であったかは，にわかに断定することはできないが，前に述べたように，もしバリュガザ地方やその奥地を支配していると *Periplus* に書かれているマンバノス王がナハパーナに比定され，かれがクシャン朝に従属していたとすれば，当時はすでにクシャン朝が北インドに勢力をうちたてていたことが考えられ，したがってその時期はウエーマの北インド支配が確立されたあとのことといえるかも知れない。しかし，この問題はなお慎重に検討する必要があると思われ，これだけで簡単に結論を下すわけにはいかないであろう。しかし，当時はすでにカーブル渓谷からバクトゥラにいたる地方は，クシャン朝の手に帰していたことは疑いがなかろう。もっとも，インダス川の河口地帯はパルティア人が支配しているという *Periplus* の記述からすれば，クシャン朝の勢力がまだそこまではおよんでいなかったものと思われる。そしてそのころ，カーブル渓谷を通って中央アジアおよび中国方面と西北インドとの間に，隊商の往来が盛んであったということは，この方面のクシャン朝の支配の確立によって，秩序が保たれ，交通の安全が確保されたことによるところが大きかったものと考えられる[155]。

他方，中国は当時は後漢の時代であるが，中国の西域経営は周知のように前漢の武帝の時にはじまる。武帝は張騫が西域から帰還後，この方面に積極的に進出をはかり，前101年には匈奴の衰勢に乗じて大宛（フェルガーナ）の遠征に成功し，さらに宣帝の治世，前60年には新たに西域都護が亀茲の東方の烏壘城におかれ，漢の勢威はタリム盆地周辺のオアシス諸国ばかりでなく，西トルキスタン方面にまでおよぶようになった。もちろんこれに伴って「絹の道」を通じる隊商貿易も盛んになっていったものと思われる。しかし，王莽の簒位によって前漢が滅びると（紀元9年），西域諸国はこの混乱に乗じて離反し，ここに中国と西域との関係は断絶するにいたった。ところが漢人勢力の後退を機に，匈奴が再たび西域諸国に勢力を延ばしはじめ，これらの国々は匈奴の苛酷な誅求に苦しまなければならなくなった。そのため後漢の建国（紀元25年）後，かれらはしきりに使を中国に送って内属することを求め，また都護の設置を懇願したが，光武帝は国内の再建を先決として，これに耳をかそうとしなかった。こうして後漢の西域経営が開始されるのは，ようやく紀元1世紀の後半に入って，紀元73（明帝の永平16）年，匈奴の河西方面への侵冠を撃退して伊吾（Hami）に兵を進め，ここに宜禾都尉をおいて屯田させてからのことである。ついで翌74年には明帝は西域都護を復活し，さらに車師後王部の金満城（Jisam）附近に戊校尉，前王部の柳中城（Lukchun）に己校尉をおいて，それぞれ数百人を駐屯させた。後漢の西域経営はここにようやく整備されたが，その後間もなく匈奴・焉耆・亀茲・車師などの反攻にあって，77年には伊吾の屯田を廃止しなければならなくなり，北道沿辺の後漢の基地はすべて奪われてしまい，わずかに班超が軍司馬として南道の于闐（ホータン）に駐留するだけとなった。しかし，班超は西域諸国の経営に努め，90（和帝の永元2）年には北道諸国の征服

154) Smith, pp. 267-68；中村氏，169-71頁．なお『後漢書』巻八十八，西域伝，大月氏国の条には，丘就卻が諸方を征服して80余歳で没したことを述べたのに続いて，次のように記されている．「子閻膏珍代為レ王。復滅二天竺一。置二将一人一監二領之一。月氏自レ此之後最為二富強一。諸国称レ之皆曰二貴霜王一。（下略）」

155) テッガートはウェーマがクジューラのあとを継いだのは紀元60年前後のことであり，またかれが西北インドを征服したのは紀元64年より前のことであったろうと推定し，かつかれの西北インド征服の意義について，「印度からカブウルを経て来る商業路，および支那からヤルカンドを通って来る商業路の支配を手に入れること」であったと述べている．（テッガアト著，山崎昇氏訳『ロオマと支那』山一書房，昭和19年〔Frederick J. Teggart, *Rome and China : a Study of Correlations in Historical Events*, Univ. of California Press, 1939〕，152頁．）

に成功し，翌91年には西域都護の復活を見て，班超が都護に任ぜられた。後漢の西域経営はこれを契機として一大飛躍をとげることとなり，やがて西域50余ヵ国が後漢に服属し，また甘英の大秦国への派遣が行なわれるほどの盛汎を示すようになるのである。しかし，班超の都護辞任（102年）いらい，西域諸国は再たび離反し，107年にはまたも西域を放棄することを余儀なくされた。その後123年には班超の子の班勇によって再たび西域経営の復活を見たが，132年以後はまたも振わなくなり，その後は西域諸国間の反目抗争を利用しながら，かろうじてその勢力を維持するという状態におちいるのである[156]。

以上に述べたところから，前漢の前1世紀，また後漢に入ってからは1世紀の末から2世紀のはじめにかけての時期および120年代には，中国の西域経営は成功をおさめたことが知られ，そのころは東西間の隊商貿易も相当盛んに行なわれたことが推測される。しかし，これらの期間を除くと，西域方面の状況は概して安定していたとはいえず，隊商の通行が妨げられることも，すくなくなかったものと思われる。*Periplus* の書かれたころは，後漢の西域経営の開始される以前か，あるいはその直後のころと考えられ，班超の西域経営が成功をおさめる以前のことであったと思われる。そうだとすれば，当時は「絹の道」の交通の条件は，それほどよいものではなかったように思われる。しかし，隊商の往来が杜絶していたわけでなかったことは，インドの沿海商業地に絹やセーレスの毛皮がもたらされていることから明らかであり，当時は時々の政治的混乱に妨げられながらも，この長大な通路を通って，隊商による輸送が続けられていたのであろう。そしてやがて班超が西域経営に成功すると，隊商の往来は一段と活発になっていったものと考えられる。

長安を発する「絹の道」は，バクトゥラからさらに西に向かい，パルティアの領内を通過して地中海岸に達するが，その中間に位置するパルティアが絹貿易の利益を独占しようとして，ローマのそれにさまざまの妨害を加えたことは，すでに述べた通りである。またローマとパルティアの関係は，アウグストゥス帝の時に一時好転を見たが[157]，その後アルメニア問題などをめぐって，両国は再たびしばしば干戈を交えるという状態を呈するようになり，この状態は紀元66年ネロ帝とパルティアのヴォロガセス Vologases 1世（51～77在位）との間に和解が成立するまで続いた。その後はトラヤヌス帝の治世にいたるまで，50年間にわたって両国間におおむね平和が保たれた[158]。しかし，当時はクシャン朝がその東方に勃興し，この新興の国家はインドへいたる交通路を掌握し，かつ国内を通過する貿易に重大な関心を持っていた。このような状態の下では，アジアの奥地の物産は安定した秩序の下に西北インドへの道をとる方が，むしろ自然であったであろう[159]。*Periplus* に書かれた西北インドの沿海商業地を中心とする東西貿易は，以上のような国際的諸条件の下に行なわれたのであり，これらの商業地はインドの物産ばかりでなく，奥地の中央アジアや中国方面の物産の輸出港として，西方世界や南アラビアの船舶をひきつけて繁栄していたのである。

（未完）

156） 伊瀬仙太郎氏著『中国西域経営史研究』巌南堂，昭和30年，1-21頁による．

157） 本稿(2)，84-85頁参照．

158） ロマン・ギルシュマン著，前掲書，255-56頁．

159） ブールノワは1世紀末ごろ地中海世界に輸出された絹は，ペルシアを通過する陸路ではなくて，海路運ばれたものといっている．（L. Bournois, *op. cit.*, p. 56.）